伊豆の石廊のやうに幽深ではなかつた。どつちかといへば明るい感じのする岬端だつた。關東では犬吠に似て、松はなかつたが、怒濤と岩とはこれよりもすぐれてゐた。山陰では、あの美保關の向うにある地藏岬の鼻がいくらかそれに似てゐた。

私だちはそこに二時間ほどゐて今度は東の路を取つて、ぐるりと廻つて窪津へ出るやうに歩いた。この間が三里。この東の徙崖――そこを私は忘れかねた。徙崖でなければ得ることの出來ない地形、小さな谷が十も二十もあつて、それを上つたり下つたりする、そしてその下には一つ一つ溪流が流れてゐる、石を集めてわたるやうになつてゐる。そしてその上つて行つたところは、いつも平な草叢になつてゐて、ぎすなどが啼いてゐる。そして向うは海、

東の海、大きな鯨などのさやれる海、その底に珊瑚を藏してゐる海、晴天には室戸の鼻が遙にその黛を見せてゐる海、それを思ふと、私の眼の前には土佐の兩脚がそれとはつきりと映つて見えるやうな氣がした。

その草叢の中の高原の一つを通りながら、

『室戸はこの見當ですか？』

私はその正面よりやゝ左に當たつてゐるあたりを指さしてI君にきいた。

『さうですな、もう少し右になりますかな……。この邊です……。』 I君は汽船に常に乘つてゐるやうな人で、あたりの地理に明るかつた。『天氣さへよければ、はつきりと見えるんですがな。空氣の加減で時には近く近く見えることがあるんですが……』

私は室戸の鼻から高知に來る間に、甲板の上からこの足摺の岬端を望んだことなどをくり返しながらその高原の草の露の中を半ぬれそぼちながらあるいた。（完）

木曾川

無京子秋

一

「ほら、あれがお城だよ。」

私は振り返つた。私の背後からは圓い麥稈帽に金と黑とのリボンをひらひらさして、白茶の背廣に濃い花色のネクタイを結んだ、やつと五歲と四ケ月

の幼年紳士がとても潔よく口をへの字に引き緊めて、しかもゆたりゆたりと歩いてゐた。地藏眉の、眼が大きく、汗がぢりぢりとその兩の頰に輝いてゐる。

名鐵の電車を乘り捨てゝ、差しかゝつた白い白い大鐵橋——犬山橋——の鮮かな近代風景の裏のことである。

暑い、暑い。バナマ帽に黑の上衣は脫いで、抱へて、ワイシャツの片手には鷄の首のついたマホガニーの農民美術のステッキをついてゆく、その子の父の私であつた。

「うん、さうか。」

父と子とはその鐵橋の中ほどで立ちどまると、下手向きの白い欄干に寄り

添つて行つた。隆太郎は一所懸命に爪立ち爪立ちした。頤が欄干の上に屆かないのだ。

てうど八月四日の正午、しんしんと降る兩岸の蟬時雨であつた。

汪洋たる木曾川の水、雨後の、濁つて凄まじく增水した日本ライン、噴き騰る亂雲の層は南から西へ、重疊して、何か底光のする、むしむしと紫に曇つた奇怪な一脈の連峰をさへ現出してゐる、その白金の覆輪がまた何よりも强く眼を射つたのである。その下流の右岸には秀麗な角錐形の山（それは夕暮富士だと後で聞いたが）山の頂邊に細い縱の裂目のある小松色の山が、白い河洲の緩い彎曲線と程よい近景を成して、遙には暗雲の低迷したそれは恐らく驟雨の最中であるであらうところの伊吹山のあたりまでをバックに、ひ

ろぴろと霞んだうち展けた平野の青田も眺められた。

その左岸の犬山の城である。

まことに白帝城は老樹蓊鬱たる丘陵の上に現れて粉壁鮮明である。

小さな白い三層樓、何と典麗なしかもまた均齊した、美しい天守閣であらう。この城あつて初めてこの景勝の大觀は生きる。生きた腦髓であり、レンズの焦點である。まつたくかの城こそは日本ラインの白い兜である。

「お城には誰がゐるの。」

「今は誰もゐないんだ。むかしね兵隊がゐたんだよ。」

私はその子の麥稈帽を輕くたゝいた。かの小さな美しい城の白光が果していつまでこのをさない童子の記憶に明り得るであらうか。そしてあの蒼空が、

雲の輝きが。

父はまたその子の麥稈帽を二つたゝいた。私は心ひそかに微笑した。「すこし強くたゝいて置け。」

私の長男である彼隆太郎は、神經質だが、意思は強さうである。一緒に行く、機關車に取りついてでもついて行くといつてきかないので、やむなく小さなリュックサックを背負はして連れて出たものだが、下りの特急の展望車で、大きな廻轉椅子に繪本をひろげてゐた時にもこの子は一個の獨自の存在であつた。食堂のテーブルに向ひ合つた僅な時間のひまにも、この子はおぼつかないながら、ナイフとフォクとは確に自分の物として、燒きたてのバンや黄色いバタや鹽つぱいオムレツの上にのぞんで、決して自分を取り亂さな

かつた。箱根の嶮路にかゝつて、後部の大きな硝子戸に、機關車がぴつたりとくつゝき、そのまゝ轟々と眞つ黑い正面をとゞろかして押し昇つた時にもそれを見たこの子は、それこそひとりで大喜びであつた。その夕方、名古屋の親戚の家の玄關に立つた時にも、別に鼻白みもしなかつた。彼が生れた日だけしか彼を見なかつたその伯母さんが「ほう、おまへが隆坊。まあ大きくなりましたね、おゝ。よく似てゐるわね、うちの子に。ほゝゝ。」

よくまあお父さんについて來られましたね、と驚いて、その式台で微笑された時にも、この子はうんとだけいつて笑つた。さうして自分で靴をぬぐとすぐに飛び込んで行つた。生みの母に初めて離れて遠い旅に出るこの子に、この子の母はよくいつてきかした。「ね、坊や、自分のことはみんな自分でするのですよ。」

だから、その晩にも、かれはひとりで必死になつて上衣を脱いだり、バンツや、シャツの釦をはづしたり、寢衣に着更へたり、帶を結んだり、寢床にころがつたり、眠つたりした。

その翌朝の今日のことである。柳橋驛から犬山橋までの電車の沿線には桑が肥え、梨が實り、青い水田のところどころには、ほのかな紅い蓮の花が、「朝」の「八月」の香ひを爽かな空氣と日光との中に漂はしてゐた。さうしたすがすがしい眺めと薫りとをこの子はどんなに貪り吸つたことか。父とまた初めて旅するこの子の瞳はどんなに黑く生々と燃えてゐたことか。さうして酒徒としての私にはやゝ差し障りさうな道連ではあつたが時とすると侮り難

い小さな監督者であらうも知れぬが、だが、私自身にも寧ろ或はそれを望んだ心もちもあつた。

私はわが子の兩手を強く握つた——よく一緒に遣つて來た。來てほんとによかつたのだ。

まことに白帝城は日本ラインの白い兜である。

おゝ、さうして、白い藹たけた晝のかたわれ月が、おゝ、てうどその白い兜の八幡座にある。

白帝城に登つたのは、その上の麓の彩雲閣（名鐵經營）の樓上で、隆太郎のいはゆる「香ひのする魚」を冷たいビールの乾杯で、初めて爽快に風味して、やゝしばらく飽滿した、その後のことであつた。

その白帝園の裏手から葉櫻の土手を歩いて右へ、緩るいだらだら阪を少しのぼると、犬山燒の同じ構への店が並んでゐる。それから廻ると、公園の廣場になる。ところで、極彩色の孔雀がきらゝと尾羽を圓くひろげた夏の暑熱と光線とは、この旅にある父と子とを少からず喜ばせた。その隣の檻の金網の中には嬉戯する小猿が幾匹となく、頓狂に、その桃色の眼のまはりを動かすのである。

さうだ、こゝだつたなと私は思つた。金と黝朱の羽根の色をした鳶の子が、てうどこの對ひの角の棒杭に止つてゐたのを觀た七八年前のことを憶ひ出したのである。私はあの時木兎かと思つた、ちかぢかと寄つて見る鳶は頭のまるい、ほんとに罪のない童顏の持主であつた。

さうだつた、これが針綱神社だつたと私はまた微笑した。

あの冬の名古屋市はまつたく恐怖と寒氣とで、その繁華な、心臓の鼓動もとまりさうであつた。悪性の流行感冒は日に幾十となくその善良な市民を火葬場に送つた。私もまた同じ戰慄のうちに病臥して、きびしい霜と、小さい太陽と、凍つた月の光ばかりとを眺むるより外なかつた。旅で病むのは何と心細かつたことだらう。それに私は貧しいかぎりであつた。島村抱月先生の傷ましい訃報を新聞で知つたのもその時であつた。

今、私の愛兒は、幼年紳士は、急斜面の弧狀の、白い石の太鼓橋を欄干につかまり遮二無二はひ登らうとしてゐる。一行の誰彼が哄笑して、やんややんやと背後から押しあげてゐる。隆太郎は嬉々として聲を立てる。やつと上

つたところで、半ズボンの兩脚を前へつる〳〵てある。父の私も前廻りして手をうつて囃し立てる。

昔と今と、變れば變るものだと、私は思ふ。さうだ、あの頃はまだ日本ラインといふ名すらさして知られてなかつたのだ。

「日本ラインといふ名稱は感心しないね、臯下と追從と生ハイカラは止してもらひたいな。毛唐がライン川をドイツの木曾川とも蘇川峽とも呼ばないかぎりはね。お恥かしいぢやないか。」

「さうですとも、日本は日本で、こゝは木曾川でいゝはずなんで。」

木曾川橋畔の雀のお宿の主人野田素峰子が直と私に和した。

「みんながよくさういひますで。」

私たちはいつのまにか、城の正面の柵内にはいりつゝあつた、輕い足どりで。

浴衣に袴の、白扇を持つた瘦せ形の老人が謹嚴に私達を迎へた。役場から見えてゐたのである。

舊記に觀ると、この犬山の城は、永享の末に斯波氏の家臣織田氏がこの地を領し、斯波滿桓が初めて築いたとある。斯波氏が滅びてから織田、德川の一族が據つて武威を張つた。小牧山合戰の際には秀吉も入城したことがあつたといふのだが、天下が家康に歸してからは、尾州侯の家老成瀨隼人が封ぜられ、以來明治維新まで連綿として同家九代の居城として光つた。

現存の天守閣は慶長四年の秋に、家康が濃州金山の城主森忠政を信州川中

島に轉封したをり、その天守閣と樓櫓とを時の犬山城主石川光吉に與へた、それを明る年の五月に木曾川を下してこの犬山に運び、これを築きあげたものである。齋藤大納言正成の建築ださうである。

この白帝城は美しい。その綜合的美觀はその位置と丘陵の高さとが、明らかにして洋々たる河川の大景と相俟つて、よく調和し映照してゐるにある。加へて、蒼古な森林相がその麓からうちのぼつてゐる。展望するに、はてしない平野の銀と綠と紫の煙霞がある。山城としてのこのプランは桃山時代の粹を盡くした城堡建築の好模型だといふが、さういへばよく肯かれる。

たゞ僅に殘つて、今にそびえる天守閣の正しい均齊、その高欄をめぐらし、各層に屋根をつけた入母屋作りのいらか、その白堊の城。

外觀こそは三層であるが、内部に入れば、それは五層に高まつてゆく。その五層の、昔ながらの木の階段を昇る時、隆太郎は危くころびかけた。さうしてその從兄の三高生から引つ抱へてもらつた。

「何でこんなに暗いの、何でこんなに暗いの。」

といひいひして上つて來た。

「あ、名古屋城が見える。」と、誰かが叫んだ。

天守閣の最上層の勾欄へ出たところで、私たちはまづ兩方の大平野を瞰望した。きのふ電車で駛つて來た沿線の曠田の綠と蓮池の薄紅とが遙に模糊とした曇天光まで續いて、たゞ一つの鬱色の濃い、低い小牧山が小さく鬱屈してゐる。その左にほうふつとして立つ紫の幻塔が見える、それが金の鱗の

お城だといふのである。さう聞けば何か閃々たる氣魄が光つてゐるやうでもある。

その地平線は白の地に、黃と少量の朱と、藍と黑とを交ぜた雲と霞とであつた。その雲と霞は數條の太い煤煙で搔き亂されてゐる。鮮麗な電光飾のかゞやく二時間前の名古屋市である。

東から北へと勾欄へついて眼を移すと、柔かな物悲しい赤と乾酪色の丘陵のうねりが閑かな日光の反射にうき出してゐる隣に、二つの圓い綠の丘陵が大和繪さながらの色調で並んで、その一つの小高みに閑雅な古典的の堂宇が隱見する。瑞泉寺山だと人がいつた。

瑞泉寺山から繼鹿尾、鴉ケ峰と重疊して、その背後から白い巨大な積雲の

層がむくりむくりと噴き出てゐた。そのすばらしい白と金との向うに惠那、駒ケ嶽、御嶽の諸峰が競つて天を摩してゐるといふのだ。見えざる山岳の氣韻は彼方にある。何と籠もつたぶどう鼠の曇り。

と、蕭々として、白い鐵橋の方へ時雨るゝ蟬のコーラスである。

爆音がする。左岸の城山に洞門を穿つのである。奇岩突兀として聳え立つその頂上に近代のホテルを建て更に岩石層の縫の隧道をくりぬき、しんしんとエレヴェーターで旅客を迎へる計畫ださうである。遊覽船は屋形、或は白のテントを張つて、日本ラインの上流より矢のやうに走つて來る。その光、光、光。恰も中古傳說の中の王子の小船のやうにちかりちかりとその光は笑つて來る。

「おうい。」と呼びたくなる。

中仙道は鵜沼驛を麓とした翠巒の層に續いて西へと連るのは多度の山脈である。鈴鹿は幽かに、伊吹は未だに吹きあげる風雲の猪色にその嶺を吹き亂されてゐる。

眼の下の大河を隔てた夕暮富士を越えて、鮮かな平蕪の中に點々と格納庫の輝くのは各務ケ原の飛行場である。

西は渺々たる伊勢の海を眼界の外に霞ませて桑名へ至る石船の白帆は風を孕んで、壯大な三角洲の白砂と水とに照り明つて、かげつて、通り過ぎる、低く、また、ひろびろと相隔たつた兩岸の松と楊と竹藪と、さうして走る自轉車の輪の光。

白帝城は絶勝の位置にある。

私は更に俯瞰して、二層目の入母屋の甍にほのかに、それは奥ゆかしく、薄くれなゐの線狀の合歡の花の咲いてゐるのを見た。樹木の花を上からこれほど近く親く觀ることは初めてゞある。いかにも季節は夏だと感じられる。

絶壁の上の楓の老樹も手に屆くばかりに參差と枝を分ち、葉を交へて、鮮明に澄んで閑かな、ちらちらとした光線である。

幾百年と經つた大木の樟は樹皮は禿げ、枝は裂けていゝ寂色に古びてゐる。その梢の群青を鴉がはたはたと動かしてとまる。かをォかをォである。

古風な白帝城。

水道の取入口は河に臨んで、その城の絶壁の下にあつた。

私たちは城を降りると、再び暑熱と外光の中の點景人物となつた。ひらひらと、しきりに白い扇が羽ばたき出した。

公園からだらだらの阪を西谷の方へ、日かげを選み選み小急ぎになると、桑畑の中へ折れたところで、しほらしい赤い鳳仙花が目についた。もう秋だなと思ふ。

簡素な洋風の家がある。入口は開けつぱなして、粗末な卓に何か仕事してゐるワイシャツの人がある。役場の老人が寄つて行つて挨拶する。幽かに私の名をいつてゐる。

私たちは洞門に入る。外へ出ると豁然とひらけて、前は木曾の大河である。

この大河の水は岩礁を割いた水道のコンクリートの堰と赤さびた鐵の扉の

上を僅に越えて、流れ注いで、外には濁つた白い水沫と塵埃とを平らかに溜めてゐるばかりだ。何の奇もなく閉けさてある。

「この水が名古屋全市民の生命をつないでゐるのです。」と詰襟をはだけた制帽の若者が説明する。

私たちは引返して、洞門をくゞると、二臺の計量機の前に出た。幽かに廻つてゐる圓筒の方眼紙の上に青いインキが針から滲んで殆ど動くか動かぬかに水量と速度とをぢりぢりと鋸形に印して進む。そこで若者は三和土の間の方五六尺の鐵板の蓋を持ちあげる。暗々たる穴の底から冷氣が吹きあげる。水は音なく流れて、地下十八尺の深さを、遙の大都會へ休むなく奔りつゝ壓しつゝある。しんしんとしたその奔入。

詩歌の本流といふものもてうどかうした深處にあつて幽に、力強く流るゝものだ。この本流のまことの生命力を思はねばならない。

私は隆太郎の手をしつかと握つた。

彩雲閣へ戻ると、小坊主は直と名古屋へ歸るといひ出した。名古屋の伯母さんは昨夜、この子の母に長距離の電話をかけてゐた。

「病氣でもされると申し譯がありませんしね。それにお菊さんもまだ一度も里歸りしないのですから丁度いゝ折ですし、呼びませうか。」といふことであつた。それに從兄弟たちは大勢だし、汽車や電車のおもちやはあるし、都會は壯麗だし、何か早く歸りたいらしかつた。

「ぢやあ、さうするか、たのむよ。」と私は甥の三高生にその子を託した。

空は薄明となる、パッと園内のカンツリー・ホテルに電燈がつく。白、白、白、給仕とテーブル。

かへろかへろと、どこまでかへる。

赤い燈のつく三丁さきまでかへる。

かへろが啼くからかァへろ。

並木の鈴懸の間を夏の遊蝶花の咲き盛つた圓形花壇と綠の芝生に添つて、

たど〳〵と歸つてゆく幼年紳士の歌聲がきこえる。

「おうい。」

私は二階の欄干へ出て兩手をあげる。

「ほうい。」

向うでもこちらを見て兩手をあげる。

白いかたわれ月は薄たけて黃に明つて來る。ほのかに白い白帝城を、私の小さい分身の子供が、立つて停つて仰いでゐる。

二

舟は遡る。この高瀨舟の船尾には赤の枠に黑で彩雲閣と奔放に染め出したフラフが飜つてゐる。前に棹さすのが一人、後に櫓をこぐのが一人、客は私と案內役の名鐵のM君である。私は今日初めて明るい紫紺に金釦の上衣

を引つかけて見た。藍鼠の大柄のズボンの、このゴルフの服は些かはゝ過ぎて市中は歩かれなかつた。だが、この鮮麗な大河の風色と熾烈な日光の中では決して不調和ではない。私は南國の大きい水禽のやうに碧流を遡るのだ。

爽快である。それに泡だつたコップのビール、枝豆の緑、はためく白いテントの反射光だ。

五日の午後一時、昨日のすさまじい濁流はいくらか青みを冴え立たして來たが、一旦激増した水量はなか〳〵ひきさうに見えない。だが、裸の子供が飛び込む、飛び込む。燦々たる岩の群と、ごろた石の河原と兩岸のいきるゝ雜草の花とだ。

泳げよ泳げ。

左は楊と稚松と雜木の緑と鬱した青とで野趣そのまゝであるが、遊園地側の白い道路は直立した細い赤松の並木が續いて、一二の氷店や西洋料理亭の煩雜な色彩が畸形な三角の旅館と白い大鐵橋風景の右袂に仕切られる。鐵橋を潜ると、左が石頭山、俗に城山である。その洞門のうがたれつゝある巖壁の前には黄の菰筵、バラック、鶴はし、印半纏、小舟が一二艘、爆音、爆音、爆音である。

と、それから、人造石の樺と白との迫持や角柱ばかし目だつた、俗惡な無用の贅を凝らした大洋館があたりの均齊を突如と破つて見えて來る。「や、あれは何です。」

「京都のモスリン會社の別莊で。」とM君が枝豆をつまむ。

「惡趣味だ。」

だが、こゝまでゞある。それより上は全くの神斧鬼鑿の蘇川峽となるのだ。彩雲閣から僅に五六丁足らずで、早くも人寰を離れ、俗塵の濁りを留めないところ、峻峭相連なつて少からず目をそばだゝしめる。いはゆる日本ラインの特色はこゝにある。

日は光り、屋形の、三角帆の、赤の、青のフラフの遊覽船が三々五々と私たちの前を行くのだ。

遡航は氷室山の麓は赤松の林と斷崖のほそぼそとした嶮道に沿つて右へ右へと寄るのが法と見える。「これが犬歸でなも。」と後から赤銅の聲がする。

烏帽子岩、風戻、大梯子、そこてこの犬歸の石門、遮陽石といふのださうな。

「ほれ、あの屋根が鳥瞰圖を描くYさんのお宅ですよ。」

幽邃な繁りてある。蟬、々、々。つくつくほうし。

「この高い山は。」

「繼鹿尾山、叡光院といふ寺があります。不老の瀧といふのもありますが上つて御覽になりますか。」

「いや、ぐん〳〵遡らう。」

風が涼しい、潭は澄み、碧流は渦卷く。紫紺の水禽は、遡る、遡る。

「あれが不老閣。」

「閑靜だなも。」

と、これより先き、中流に中岩といふのがあつた。振り返ると、いつとなく左後ろ斜に岩は岩と白い飛沫をあげてゐる。

それから、千尺の翠巒と斷崖は流華溪となるのである。

波、波、波、波、波、

波、波、波、波、

波、波、波、波、波、波、

波、波、波、波、

波、波、波、波、波、波、

「爽快々々。」

「富士ケ瀬です。」

すばらしい飛沫、飛沫、飛沫、奔流しつつ、飛躍しつつ、擾亂しつつだ。

一面淙々たり。

「や。」

「赤岩です。」とM君。

まさしく瑠璃の、群青の深潭を擁して、赤褐色の奇巖の群々がくわつと反射したところで、しんしんと沁み入る蟬の聲がする。

稚い雌松の林があり、こむもりとした孟宗藪がある。藪の外にはほのぼのとした薄くれなゐの木の花も咲いてゐる。

「あれは何の木の花だね。」

「漆の花だなも。」て、巧に棹を操る舳の船頭である。白のまんぢう笠に黒色

鮮かに秀山靈水と書いてある。

そのあたりが栗栖の里。

と、書き落したが、その漆の花が目に入るまでに、石床の大きなてこてこの岩、お富與曾松の岩といふのがあつた。戀は悲しい、遂に添はれぬ身の果を嘆いて、お富もまた離ればなれに上の手の岩から身を躍らしたと俚俗にいふ。

「これがローレライて。」

ローレライはちと苦笑される。

新赤壁は左にあつた。その前を昔の中仙道が通つて、ひとつうねると岩屋觀音がある。白い汚れた幟が見える。

ここて再び蕭々たる急湍にかゝる。觀音の瀬てある。

「まだひどい水て。」と前のがのめる。

やつとのことて、その瀬をのぼり切ると、いよいよ河幅は狹くなる。いよいよ差迫つた奇岩怪石の層々々、荒削りの絶壁がまたこれらに脈々と連なりそびえて、見る目も凄い急流となる。惜しいことには水がたかく、岩は半沒して、その神工の斧鉞の跡も十分には見るを得ないが、まさに蘇川峽の最勝てあらう。

齋藤拙堂の「木蘇川を下るの記」に曰く

「石皆奇狀兩岸に羅列す、或は峙立して柱の若く、或は折裂して門の如く、或は渴驥の間に飲むが如く、或は臥牛の道に横たはる如く、五色陸離として

相間はり、皺率ね大小の斧劈を作す、間ま荷葉披麻を作すものあり、波浪を濯うて以て出づ、交替去來、應接に暇あらず、けだし譎詭變幻中清秀深穩の態を帶ぶ。」

兜岩、駱駝岩、眼鏡岩、ライオン岩、龜岩などの名はあらずもがなてある。色を觀、形を觀、しかして奇に驚き神悸き、氣眩すべきてある。

拙堂も觀た五色岩こそまた光彩陸離として衆人の目を奪ふものてあらうかたゞ私の見たところては、この蘇川峽のみを以てすれば、その岩相の奇峭は豐の耶馬溪、紀の瀞八丁、信の天龍峽におよばず、その水流の急なることは肥の球磨川にしかず、激湍はまた筑後川の或個處にも劣るものがある。これ以上の大江としてまた利根川がある。たゞこの川のかれらに遙に超えたゆゑ

んは變幻極まりなき河川としての綜合美と、白帝城の風致と、交通に利便であつて近代の文化的施設余裕多き事てあらう。原始的にしてまた未來の風景がこの水にある。船は翠嶂山の下、深沈とした碧潭に來て、その棹をとめた。清閑にしてまた飄々としてゐる。巉峭の樹林には野猿が啼き、時には出て、現れて遊ぶさうてある。

私は舟より上つて、とある巖頭に攀ぢのぼつた。

蓋し天女こゝに嘆き、清軀鶴のごとき黄巾の道士が來つて、ひそかに丹を練り金を練る、その深妙境をしてこゝに夢み、或は遊仙ケ岡と名づけられたものてあらう。

遺憾なは「これより上へはどうしても今日はのぼれませんて。」と舟人はま

た棹をいつぱいに岩に當てゝ張り切つたことである。

たちまち舟は矢のやうに下る。

千里の江陵一日にかへる。

おゝ、隆坊はどうしてゐる。

自動車は駛る。

犬山の町長さんは若い白面の瀟洒な背廣服の紳士であつた。白帝園はカンツリー●クラブの大食堂で私たち三人——私と素峰子と運轉手と——が、この八月六日の極めて簡素な午餐を認めてゐた時に、たまたま給仕を通じて私に挨拶に見えた。はいつて來ると、名刺を一々運轉手君にまでうやうやしく手交した。若しさうと知つてしたのならば美しいことだと微笑された。また

それほど黒背廣の運轉手君もひとかどの紳士らしく見えた。すなはち近代の日本ラインである。

カンツリー●クラブは緩い勾配の屋根の、錆色の羽目の中二階で、簡素ないゝ趣味の建築である。バンガロー風で、正面と横とに廣い階段がついてゐる。その正面の階段の下の、明るい色彩の花壇の前で、私は改めて一禮すると、車上の人となつた。雀のお宿の素峰子はきのふの朝から激しい胃痙攣で顔色がなかつた。今日も案内がおぼつかないので、犬山橋驛に廻つて、赤い腕章の旅客課の制帽君の同乘をたのむことにした。

自動車は駛る。鐵橋を北へ、まつしぐらに駛つて行く。と、ちらつと、白帝城と夕暮富士とが目を掠める。

きのふの夕燒は實によかつたと思ふ。その返照はいつまでも透明な黃の霞んだ青磁や水淺葱の西の空に、紅く紅く地平の積卷雲を燃え立たせた。さうして紫ばんで來た秀麗な夕暮富士の上に引きはえた吹き流し形の、天蓋の、華鬘の、金襴の帶の、雲の幾流は、緋になびき、なびきて朱となり、緋紅となり、灰銀をさへ交へたやはらかな毛ばだちの樺となり、また葡萄紫となつた。天守閣のかすかに黃に輝き殘る白堊。さうして大江の句深い色の推移、それが同じく緋となり、緋紅となり、やはらかな乳酪色となり、藤紫となり、瑠璃紺の上びかりとなつた。さうして東の瑞泉寺山に涌出した腦漿形の積雲と、雷鳴をこめた積亂雲との層が見る見る黃金色の光度を强めて今にも爆裂しさうに蒸し返すと、また南の葉櫻の土手の空にもむくりむくりと同じ

色と形の入道雲が噴きあがつてゐた。この夕燒けもラインとよく似た美しい一つの天象だといふ。伊吹山の氣流の關係で、この日本ラインにのみ惠まれた雲と夕日の季節の祭りである。

私たちの輕舟は急流に乘つて、まだ大圓日の金の光輝が十方に放射する、その夕燒けの眞近をまたゝく間に走り下つて來た。さうして白帝城下の名も彩雲閣の河原に錨を下ろし纜をもやつたのであつた。と、名古屋から電話がかかつてゐて隆太郎の母は直にも見えるはずだといふことであつた。

それが今日は生憎早曉からの曇りとなつた。四方の雨と霧と微々たる雫とはしきりに私の旅情をそそつた。宿醉の疲れも濕つて來た。

この六日は下の河原で年に一度の花火の大會がある筈であつた。名古屋の

甥たちや隆太郎にも見に來るやうに通知はしたが、それもどうやら怪しくなつて來る。果然雨天順延となつて、私の旅行日程にもまた一日の狂ひが生じて來たので、無聊に苦しむよりは雨の日本ラインの情趣でも探勝しようかとなつた譯である。

自動車は駛る。

と、氣がつくといつのまにか北へ向かつたので南へ駛りつゝあつた。や、例の樺と白との別莊だなと思ふと、中仙道は川添ひの松原と桃林との間を東へ東へと驀進しつゝある。

新赤壁の裾を幾折れして、岩屋觀音にかゝる。漢畫風の山水である。トンネルがあり、橋がある。路はやゝ沿岸を離れて桑畑と雌松の林間に入る。農

家がある。鳳仙花や百日草が咲き、村の子が遊び、鷄がけゝつこつこつこつである。高原の感じである。

秋、秋、秋、秋。

太田の宿にはいる。右へ折れて鐵橋を渡れば、對岸の今渡から土田へ行けるのだが、それがライン遊園地への最も近い順路であるのだが、私は眞直にぐん〳〵駛らせる。なるべく上流へ出て迂回しようと思つたのである。

ストップ！古井の白い鐵橋の上で、私は驚いて自動車を飛び降りた。その相迫つた峽谷の翠の深さ、水の碧くて豐かさ。何とまた鬱蒼として幽邃な下手の一つ小島の風致であらう。煙霧は模糊として、島の向うの合流點の明るく廣い水面を去來し、濡れに濡れた高瀬舟は墨繪の中の簑と笠との舟人に操

られてすべつて行く。

私たちがその青柳橋の上に立つてゐると、何が珍しいのかぞろぞろと年寄や子供たちが周圍にたかつて來た。この川はと聞くと飛驒川と誰か答へた。高山の上の水源地から流れて來てこの古井で初めて木曾川に入るのだとまた一人が傍から敎へてくれた。ぢやあ、あの廣いのが木曾川だなと思へて來た。

「あの島にお堂が見えますが、あれは何樣ですね。」

「小山觀音。」

「緣日でもありますか。」

「てうど七月の九日が御開帳でして、へえ、毎年です。」

「店も出ませうね。」

「ええ、河原は見世屋でそれはもういつぱいになりますて。」

水に映つて、それは閑雅な灯のちらくてあらうと思へた、この支流である飛驒川の峽谷はまた本流の蘇川峽とは別趣の氣韻をもつて私に迫つた。上手の眺めにもうち禿た岩石層は少く、すべてが微光をひそめた繼色の丘陵であつた。深沈としたその碧潭。

私たちはまた車上の人となる。藍鼠と燻銀との曇天、丘と桑畑、台が高いので、川の所在は右手にそれぞと思ふばかりで、對岸の峰々や、北國風の人家を透かし透かし、どこまでもと自動車は躍つてゆく。土の香がする。草のかをりがする。雨と空氣と新鮮な嵐と、山蔭は咽ぶばかりの松脂のにほひであ

る。駛る、駛る、新世界の大きな昆虫。

「見えた。あの鐵橋からまはりますか。」

「よし。」

そこでハンドルを右へきゆつと廻す、囂々々とそのつり橋を渡つてまた右折する。兼山の宿である。と風光はすばらしく一變する。爽快々々、今來た峽谷の上の高台が向うになる。薄黄の傾斜面と綠の平面、平面、平面、鉾杉の層、竹藪、人家思ひきり濃く、また淡く霞む疊峰連山、雨の木曾川はその此方の田や畑や樹林や板屋根の間から、突として開けたり離れたりする。岩礁が見える。船が見える。あ、檜だ、瓦だ、繪看板だ。

遙にまた煙突、煙突、煙突である。あの黑い煙はと聞くと、あれは太田だ

といふ。よくも上まで來たものだと思ふ。いや、かれこれ二時間は走つてゐますと運轉手が笑ふ。かうして兼山から伏見、伏見から廣見、今渡とかつ飛ばすのである。

土田は名鐵の犬山口から分岐する今渡線の終點に近い。ちらとその驛をのぞいて、また右へ、ライン遊園地へ向けて、また〳〵驀進々々々々である。行けるところまで行つて、危く何かにぶつかりさうにしてとまると、奇橋がある。「土田の刎橋」である。この小峽谷は常に霧が湧き易くて、こめると上も下も深く姿を隱すといふ。重疊した岩のぬめりを水は湍ち、碧く澄んで流れて、いふところの鷺の瀨となる。

橋の袂で敷島を買つて、遊園地の方へほつりほつりと私たちは歩いてゆく。

雨はあがりかけて日の光は微かに道端の早稲の穂にさしかけて來る。七夕の紅や黄や紫の色紙がしつとりとぬれにじんでその穂や桑の葉にこびりついてゐる。死んだ螢のにほひか何かゞ咽んで來る。あけつぱなしの小舍がある。蠶糞や繭のにほひがする。筵が雜然と積んである。表に「自動車無料であづかります」と貼札してある。この道七八丁。

宏壯な北陽館の前に出る。二階の渡り廊下の下の道路を裏へ抜けると、こゝに驚くべき大洞可兒合の壯觀が眼下に大渦卷をまきあげる。斷崖百尺の上の、何と小さな人間、白の黒の紫紺のぽつり、ぽつり、ぽつりだ。

大洞可兒合は蘇川中の一大難所である。その本流と可兒川の合するところ、急奔し衝突し、抱合し、反撥する余勢は、一旦、一大鐵城のごとく峭立し突

出する黒褐の岩石層の絶壁に殺到し、遮斷されて水は水と擊ち、力は力と抗ひ、波は岩を、岩は波を嚙んで、こゝに囂々、淙々の音を成しつゝ、再び變壓し、轉廻し、捲騰し、擾亂する豪快無比の壯觀を現出する。藍と碧と群青と、また水淺葱と白と銀と綠と、渦と飛沫と水漚と、泡と、泡と、泡と。

膚粟を生ずとはこのことだらう。私は驚いて數歩下つた。

そこで、また踵をめぐらして岩角と雜草の間の小徑を香木峽の乘船地へと向つておりた。

しかも明るくひろくうち開けた上流の空の、連峰と翠巒、濛々たる田園の黄綠、人家、煙。霧、霧、霧。

どこかで茶でも飲まうてはないか、茶見世ぐらゐはあるだらうといへば、

ありますありますと答へながら、赤い腕章の制帽はそれでも一軒の葭簀の茶亭は通り越してしまふ。途中に白いペンキ塗の洋館の天狗何々と赤い看板を出したそのドアの前にかゝつたが、窓のガラスもことごとくしめきつて「當分休業中」であつた。夏でもここまでの遊覽客はさして見えないらしい。ライン遊園地もまだ完成しないで、自然の雜木原に近い。窪地にスケート・リンクなどがあるくらゐだから冱寒はきびしいのであらう。崖の縁へ出ると漸く休憩所の一つを見出した。人の氣配もせぬので、のぞいて見ると隅つこの青く透いたサイダー瓶の棚の前に、鱗光の河魚の精のやうな爺が一人、しよぼんと坐つてゐた。ぼうと立つのは水氣である。

翠嶂山と呼ぶこのあたり、何かわびしい岩礁と白砂との間に高瀬舟の幾つ

かゞ水にゆれ、波に漂つて、舷々相摩するところ、誰がつけたかその名も香木峽といふ。左に碧くそゝり立つのが碧巖峰である。

そこで屋形の船のひとつを私は小手招く、そこゝの薄墨の、また朱のこもつた上の空の霧はいよ〳〵薄れて、この時、雲のきれ間から、怪しい黃色の光線が放射し出した。これからまたひとしきりなぎになつて蒸し暑く蒸し暑くなるのである。

「ぢやあ、こゝでお別れします。私は土田へ出てこの山の裏手を廻つて歸りますが、どちらが早いかひとつ競爭して見ますかな。」

自動車の運轉手が笑つた。

「よからう。」と私たちは舟に乘り込む。船頭はやはり二人で、棹をつつッと

突張るや否や、後のが櫓べそを調べると、櫓をから〳〵とやつて、「そおれ出るぞお」である。

白帝城下まで二里半だといふことである。

舟は走る、五色の日本ライン鳥瞰圖が私の手にある。

「ほう、あれが少女の瀧かね。」その瀧は左の綠蔭から懸つてあまりに幽かな水の線、線、線であつた。

右にうづくまるのがライオン岩、深嚴として赭黑である。と、舟は直に遊仙ケ岡の碧潭にさしかゝる。

その仙境を離れると、流れはいよ〳〵急である。昨日に比して少からず減じた水量のために河中の巖石といふ巖石は、こと〴〵く高く高くせり上つて、

重積した横の、斜の斧劈も露はに千狀萬態の奇景を眼前に聳立せしめて、しかも雨後の雫は燦々と所在の岩角、洞門にうち響きうち響き、降るかとばかりに滾れしきる。

河峽はいよ〳〵狹く、流れはいよ〳〵急に、舟は危ふく觸れんとして疊岩絕壁のすれすれを走り下る。

「や、あれは。」

と、目をみはつた。

一羽、ふり仰ぐ一大岩壁の上に黃褐の猛鳥、英氣颯爽としてとまつて、天の北方を睨んでゐる。鈎形の硬嘴、爛々たるその兩眼、微塵ゆるがぬ脚爪の、しつかと岩角にめりこませて、そしてまた、かいつくろはぬ尾の羽根のかす

かな伸び毛のそよぎである。

「鷹だね。」

「え、」と驚いて旅客課「さうです。鷹です。」

冷氣一道に襲つて、さすがに蘇川は深山幽谷の面影が立つた。

「身動きもしないんだね、船が下を通つても。」

私は驚いたのである。

心音の動悸が止まぬのに、またしても一羽、右手の駱駝岩の第一の起隆の上に、嚴然としてとまつてゐる。相對した上の鷹、おそらくはつがひであらう。

いゝものを見たと私は思つた。野猿の聲こそは聞けなかつたが、それにも

増して私は偶然の、時の恩寵を感じずにはゐられなかつた。

私は幾度も幾度も振返つた。

激湍、白い飛沫の奔騰する觀音の瀬にかゝつて、舟はゆれにゆれて傾く。

鷹は絶壁の遙に黑く、しかも確實に二個の點として嚴としてゐる。小さく小さくなる。一個は消えても、一羽の英姿はいつまでもいつまでも殘つてみえる。その向うの空のぬれた黝朱の亂雲、それがやがては禍となり、黄となり、朱に丹に染まるであらう。日本ラインの夕燒けにだ。

あ、白帝城が見え出した。

香木峽から四十分、彩雲閣の河原に着いて、上ると、その白帝園のカンツリー・クラブの前へ、無料休憩所の方から、驚いたスピードで大型の昆虫の

黒に藍の自動車がはしつて來た。ハンドルを兩手に、バナマを阿彌陀に頭の毛を振り振り、例の快活な笑ひの持ち主だ。

「や、萬歳、勝負なし。」

三

「ほら、坊や、さよならだ、帽子をお振り。」

「さようならァ——。」

「もひとつ。」

「さようならァ——。」

下りの高瀬舟に坐つてゐるのは私たち親子と雀のお宿の主人との三人である。

彩雲閣の二階からは盛んに白いハンカチーフがゆれて光る。女中たちである。

私たちも一寸芝居氣を出して、バナマや雀頭巾を振る。童話の中の小さな王子のお蔭で、朗らかに朗らかに私たちも帽子が振れるといふものだ。

私たちは下る。赤い雌松の五六本をあしらつた二重舞台の樓閣が次第々々に白帝城の翠巒に隱れてゆく。ちらとまたその隙間から白いひらひらが見えたかと思ふと、また老樹の樫や楓の鬱蒼たる枝の繁みに遮られてしまふ。と、

それつきりで、八月八日は午前十一時の閑寂なせみ時雨になる。日本ラインとのお別れである。

水道の取入口も過ぎ、西谷は迎帆樓の前も過ぎた。あの前での昨日の人だかりといふものは晝の花火の黄煙菊よりも埃をあげた。丁髷鬘の赤陣羽織に裁付袴の爺どもが拍子木に鉦や太鼓でライン酒とかの廣告の口上をまくし立てる。その幟の蔭から、盆の上のリキュウグラスに手を出して無料じや〳〵といふ赤いのを一杯試し飲みして見たところで、「これは燒酎かね。」と聞けば「いや別製でなも、原料水は、へへん、ラインの水で」と扇を叩いた。「赤いのは。」と聞けば「色で染やしたて。」とまた扇を叩いた。色は樺太のフレップ酒に似て、地の味はやはり燒酎の刺激がある。土地の名産忍苳酒は味淋に

強い特殊の香氣を持たしたものらしい。

それは兎に角、舟は今、三光稲荷の下にかゝつて來る。三光稲荷の夏祭は津島祭の逆鉾舟——一年十二ケ月は三百六十五の提灯を山と飾つた華麗と凉味とを極めた囃子舟である——にならつて、これもおなじく水の祭が極彩色てと町長の話であつた。今後はいよいよ盛んに奬勵する意向にも聞いた。民衆の祭は盛んであるほど鄕土の意氣が勇む。水を祭るは水鄕のほこりである。精華である。私の鄕國筑後の柳河は沖の端の水天宮の水祭には、杉の葉と櫻の造花で裝飾され、簾を卷き蓆張りの化粧部屋を取りつけた大きな舟舞台が、幕あひには笛や太鼓や三味線の囃子もおもしろく町の水路を三日三夜さも上下する。さうして町のかはるたびに幕をかへ、日をかふるたびに歌舞伎の藝

題も取りかへる。さうした小運河はまた近在の小舟でうづまつてしまふ。その五月の喜ばしさといふものはなかつた。まことに水は祭られてよい。夏は、風は、魚は、岩は、砂は、この日本ラインにしていよ〳〵煌々と祭らるべきである。その三光稲荷の水の祭もほんのすこし前に過ぎたばかりだといふことであつた。

「坊や、昨夜の花火は奇麗だつたね。」

「うん、奇麗だつたね。」

ちようど河の中の白い三角洲の横を舟はまた走りつつあつた。その洲には赤い旗がひるがへり、數百の花火筒が林立した前の日であつた。

隆太郎はその朝、從兄弟たちと名古屋から來た。彼の母はたうとう見えな

いことになつた。すつかり期待を裏切られた幼童の失望はどれほど大きかつたか。それでも彼は堪へに堪へてゐた。一生懸命に口を結んで泣くまいとしてゐた痛々しさが父の胸にはひたひたと響き返した。この暑さにこの幼い子を十余日の旅に連れあるくことは危險でもあり、少々果斷にも過ぎた。それで來られるものならその母に預けて、私は單獨に氣輕にあるき廻らうかと思つても見た。何でも余りに便通がないので、名古屋では擧つて心痛したといふことであつた。「そりやあね、庭の鳳仙花の中か、裏の玉蜀黍畠にでも連れてきやよかつたんだよ。」と私は三高生に笑つて見せたが、「それでも下劑藥を飲ましたので通じましたよ。」とその甥がまた笑ひ出した。さうして、「ちよつと泣きましたよ。」と顔を赤くした。病氣にでもなられては困るが、兎も角、

それでは一緒に連て行かうとなつた。よしスバルタ教育だ。この旅行は隆太郎にとつては生れて初めての意義ある見學であるのだ。幼兒の叡智と感情と感覺と意志との上に增大し生長し洗練さるゝ何物かは寧ろ危險以上のものであるに違ひない。て、私も決行したのであつた。

「や、花火の椀殼だな。」

炸裂した後の黑い半分づつの椀殼が水にぽかり〳〵と漂つてゐる。をしどりのやうだ。

まつたく、長い、薄明がいよいよ暮つくして短い夏の夜に入つてからの花火の壯觀はすばらしかつた。菊花壇、菊先亂發、二尺玉、三尺玉、大菊花壇、二百發三百發の早打、電光萬雷、銀錦變花、菊先錦群蝶、青光殘月、等々々。

燦爛たる孔雀玉の紫と瑠璃と、翡翠と、青綠。紅と綠の光彈、圓蓋、火箭、ああ、その銀光の投網、傘下し、爆裂し、奔流し、分枝し、交錯し、紛亂し、重疊し、傘下し、傘下し、傘下し、八方に爛々として一瞬にしてまた闇々たる、淸秀とも、鮮麗とも、絢爛とも、崇美とも、驕奢とも、譬ふるに言葉も絕えた。加へて波上の炎々たる水雷火、その魚鱗火、連彈光、鵜舟の篝、遊覽船の萬燈、提燈、手投げの白金光、五彩の變々たる點々光、流出柳箭、けだし參と信との花火藝術の最高を極め精を盡くし神を凝らしたものであつた。

空には月明らかに雲薄く、あまつさへ白帝城の甍と白堊とを耿々と照らし出したのである。

然しまた、さうした一夜の歡樂も過ぎた。祭りのあとの果敢なさ、そのあはれさは、この水にしてひとしほである。

舟はいま夕暮富士を右手に、その三角洲の緩い彎曲線に沿うて、左寄りの分流を走りつゝすべりつゝある。

阪下といふ、ごろた石の土手の斜面に舟夫はちよいと舟をとめる。十二三ばかりの、女の子が前かゞみに何か線の細かな菜の葉をすいてゐる、芹かときいてみるとかすかに顔を赤らめながら、人參の葉だといふ。その傍で半襦袢の毛脛の男たちが、養蠶用の圓座をさつさつと水に浸して勢ひよく洗ひ立てる。空の高瀬舟が二三艘。

船はまた岸を離れる。振り返ると、おゝ何と典麗な白帝城であらう。蓊鬱

たる、いつも目に親しんで來たあの例の丘陵の上の、何と閑雅な甍、白い樓閣、この下手から觀るこの眺めこそは絶勝であらう。私はつくづく下つて來てよかつたと思つた。

「坊や、ほら、お城が見えるよ。」

「ほんとだ、お城だ。」

だが、その白帝城とも、ぢきにお別れである。

分流は時に細い早瀬となり、蘆荻に添ひ、また長い長い木津の堤の並木について走る。堤には風になびく枝垂柳も見える。純朴な古風の純日本の驛亭もある。さうして昔作の農家。

私たちはまた振り返る。「さやうならお城」はるかのはるかの白帝城。

船はまた大江の河心に出る。石船の帆が白く、時に薄い、紫の影の層をはらんで、光りつゝ輝きつゝ下をまた眞近を、群れつゝ、離れつゝ去來する。

それよりも、實に驚いたのは、宏大な三角洲の白砂のかゞやきであつた。實に白い、雪以上の、白以上の強い、輝く白、その「白」がその全面をもつて、直射する、また氾濫する日光を照りかへす、その「白」の美感は崇高そのもの、神采そのものでなくて何であらう。常に「白」の氣韻を香氣を幻惑を愛する私にとつて、これほどのかうがうしい魅惑はむしろ私を圓寂境の思慕にまで誘ふ。私はこれほどまでの石や砂の白い實相をかつて見たことがない。

さうして汪洋たる本流、輝く白のあなたの分流、對岸の、また下流の煙霞、

「海、海。」と隆太郎は叫ぶ。

ところて、その子はビールの空瓶を舷から、ぽんと水に投げる。瓶は初め茶褐に、後は黒く、首だけもたげして流に浮く。青の紫の鴨の首、うしろにうしろに遠くなる。それほど舟が早いのだ。

「まだあかないの、まだあかないの。」

「坊や、そんなに飲めるかい、待つてくれ。」

それでも空のビール瓶がほしさの、立ち上つては兩手に、しゆうつとコップにむりやりてある。

「困るよ、困るよ、ほら飛行場が見える。」

と、岸には黒人種風景の、裸の童子と童女がゐる。松と草藪と水邊の地面と外光と、筵目も光つてゐる。さうして薄あかい合歡の木の花、花、花、

そこが北島、向ふ遙かが草井の渡し。

前波不動の幽雅な小丘を右に見て、また耳に聞く左は梭の音のしづかな繪絹織る松倉の里である。

と、本流の水はまた一つの三角洲を今度は左に押しつめて、廣く廣く斜に、河幅を右へ右へと開いてゆく。おゝ、また渺々として模糊たる下流。

笠島の渡しといふところを過ぎる。右の斜面の鼠色じみた帆の幌の小舍の内では、葎ひとつの船大工が船の内側を河心へ向けて、とんとん、とんとんとんとんと釘を打ち打ちしてゐる。ほれぼれとしたものだ。遊ぶやうなその鐵槌の手。

私たちの舟はまた櫓の音も緩く緩く波上に遊んでゆく、流れはもはや急で

はない、大江の浩蕩とした漣である。

北方村本郷といふところで、私たちは三艘の水車船を見た。また下流で二艘の同じやうな船を見た。船には家があり横の兩側には二台づゝの輕い小板の水車が廻つてゐた。內部には杵の音がし、小糠のにほひがこめ、男女の聲がしてゐた。支那の戰車のやうな形の船であつた。これらは流れの瀨の替はるにつれて、昨日は下、明日は上へとのぼるのである。簡素ないい情趣である。

「これは、童謠になるな。」と、私は眺め眺めすれちがつてゆく。

東海道線は長い長い木曾川の鐵橋が近づいて來た。

「あ、あの右袂が笠松の四季の里です、向うが雀のお宿。」

素峰子は舳に立つて、白に赤の黒の彩雲閣のフラフを高く高く振なびかす。ちようど鐵橋をくゞつて出たところである。見ると、やゝ下手の左岸の松林の外では何かしきりに叫んで騒いでゐる群があつた。裸の童たちである。童ケ丘とはそのお宿の砂丘にかつてたのまれて私が名付けたものであつたが、かうしてちかぢかと來て眺めるのは今が初めてである。

「呼んでますわア。」

「君のとこの林間學校の子供たちだね。幾人ぐらゐ來る。」

「昨年は百六十名ほど來ましたが、この夏は六十名くらゐでせうか、それに岐阜加納竹ケ鼻笠松の子供が一週に四五回は先生に連られて參りました。さうです。五七十名づゝ一ノ宮、奥町の子供も遊びに來ますで。」

「それは盛んだな。」と私はまた、一人が飛び飜つた向うの投水台の強いかゞやきをうち見やつた。警戒標の旗の先だけが、その下の河心に赤い點をうつてゐる。雨後の増水に流されて位置を變へたのであらう。

「起の水泳場といふのはどこだね。」

「ずつと下でなも。」と蹲つてゐたのが、また立ちかける、先棹である。

「起はどうもあかんで。」と後の櫓の手が右斜へいさゝか引き氣味に、ここで刻みかけると、何鳥か白く光つて空をば過ぎた。

と、私たちの小舟は小豆色のひろびろとした洲の淺みに沿つて、いきれた つ蘆や薄のあひだにすれすれと横になつてとまつた。四季の里である。

と、その時、その裏の岸邊に早くも出迎へてゐたその里の老主人と笠松の

町長さんとてあつた。

そこで「どうぞお連れ申したで。」と雀頭巾は素峰子の眼鏡が光つた。

「美濃側の笠松へ第一に舟は着けてお貰ひしないと承知せぬで。尾張側の雀のお宿は後まはし後まはし」で笑つて、「木曾川下りといへば昔はこの笠松まであつてゐたものだ。日本ラインばかりで獨占するとは怪しからん。」とその家の主人がいきまいたと、それは昨日聞いた話であつた。さう聞いて、今日の眺めに接すると、全くさうに違ひないと思へた。河口はとにかく、犬山からこの笠松までの悠容たる大景を下流にして、初めて中流の日本ライン、上流の寢覺、惠那の諸峽が生きるのである。河川として他に比類のない多種多様の變化が、さうしてそれらの綜合美が。

水に臨んだ廣い樓上に登つて、私は下りに下つて來た鐵橋の遙を顧みた。蘇川峽の奇勝、岩壁の鷹、白帝城、雨と朱の夕燒けと花火と、今はたゞ眼に入るものは雲である、江陵である。つい一二時間前に見た白く輝く三角洲、分流の早瀨、船大工のとん〳〵、水車船の野趣、何だか遠い日の向うの煙霞と隔たつてしまつたやうな氣がする。

私はまたこの晴れた日の大江の下のあなたを展望した。長堤は走り、兩岸の模糊たる彎曲線の末は空よりやゝ濃く黑んで、さて、花は盛りの紅と白とのこの庭の百日紅の近景である。幽雅な繁みと茶亭と、晩夏の日射と蟬の聲と。

簾の卓と籠の椅子と、冷した麥茶のコップと鉢の緑の羊羹と鮎の餅菓子。

東と南とに欄干は繞り、廂にはまた藤の棚がその葉の青い光線から、おなじくまだ青い實の莢を幾條も幾條も垂らしてはゐるが、さうして晝間の岐阜提灯にもが、風はそよともしないのである。

暑い、なか〳〵激しい。蠟塗りの白い團扇が亂れ出した。

午後一時。見おろす一面の河幅は光り、光の中に更に燦々たるものが光つて、その點々を舷側に、聲なく浮ぶ小舟がある。小舟には一二の人かげの水にうつゝて、何やらしきりに棹で河心を探つてゐる。それは明るいしづかな畫趣である。河底の砂にうもれた「木はし」をあさるのださうな。「木はし」は流木の髓であると聞いた。洪水に押流されて來た樹木の磨き盡くし洗ひ盡くされた末の髓である。焚木としてこれほどのものはなからう。烈々として燃え淬ひ

とつ殘らないといふ。河畔の貧しい生活者にもかうした天與の恩惠はある。

うち興じてゐると、「しこらん」といふ土地の名菓が出る。豐太閤が賞美してこの名を與へたさうである。形は兜の錏のごとく、かをりは蘭のごとしといふのださうな。略して「しこらん」。私は和蘭陀語かと思つた。おこしの類で、細く小切にした、かりかりと齒にあたつて、氣品のある杏仁水の風味がある。

この笠松はその昔「葦の洲」と稱へた蘆荻の三角洲で、氾濫する大洪水の度ごとにひたつた。この狐狸の巣窟を發いて初めて拓いたのが三ツ家の漂流民だと傳へてゐる。その後秀吉が築堤してから、元は尾張に屬してゐたのを何か心あつて美濃の所領に移したものだと、「舊幕の頃には天領として郡代が置か

れたものでして、ついこの下の土手に梟首場の跡がございますが」。と町長、椅子から伸び上つた。

鐵道開通以來、土地の人が頑固で、折角の停車場の設置を肯ぜなかつたばかりに、木曾下流の渡船場として殷賑であつたこの笠松街道もさつぱり寂れてしまつたといふことであつた。

この四季の里は俳名馬好と號した常に馬を樂んだ風狂の伯樂が初めて營んだものださうであつた。その馬好ももう五十年前とかに亡くなり、今は縣會議員である當主が老後の樂みに買取つて、おなじく幽雅な料亭としてその跡を承け繼いでゐる。

ぢいぢい蟬がまたそこらの木立に熬りつき出した。ぢいぢい蟬の聲も時に

は雲と梢を閑かにする。

進められるまゝに私は隆太郎と階下の白い浴室にはいる。何かの蔓が匍つた窓から、覗くと蘆荻が見え、河面が見える。白い浴槽の内では、そこで私が河童の眞似をする。隆坊はきやつきやと逃げあがる。

「昨日はおもしろかつたかい。岩がたくさんあつたらう。」

「うむ」

「お猿がゐなかつた。」

「ゐなかつた。僕、奇麗な銀のおしつこをしたよ。」

「ふうん。」とその父は亂れた髪の毛を石鹸で洗ひかける。

實は宵の花火までの間を是非その子にも見學させて置きたいと思つて、甥

たちに連れて出てもらつた。そこで土田まで電車で、香木峽から舟でこの父、とおなじに、日本ラインを下つて來たのであつた。

「何でもよく見ておくんだ。今度來てよかつたね。」

「よかつたね。」

上らうとすると、きさくな女中が大きな桃色のタオルを兩手にふうわりとふくらまして來た。

「さあ、かはいいお坊つちやん、お拭きしましよかなも。」

「いやだ。」といふ裸のを、きゆつとかき抱くやうにする。逃げかかる。さうなると、いよいよ女中もかまつて來る。「ね、いい子だなも、いい子。」さあ小坊主怒るまいか「馬鹿野郎、こん畜生。」爪で引ッ搔く打つてかゝる、彼は彼

て一個の獨自の存在であり、個の人格として取扱はれないかぎり、少くとも自尊心を傷つけられたと感じたらう。狂人が狂人としての待遇を受くればきつと怒る。おなじ心理で、幼兒もあまりに幼くちやほやされると憤る。童謠の創作にもこゝはよほど注意すべきところだ。「うつちやつて置いてくれたまへ、自分で拭くから。」と私は聲をかけた「さうかなも、氣の強いお子はんやなも。」

二階には上つたが、隆太郎余憤が晴れないと見えて、窓の障子紙をぴりぴりぴりと裂き初める。だが、こちらは堆く持つて出された畫帖や色紙や短冊をさうはばりばりとやる譯にはゆかない。

少憩の後、私たちは立ち上つた。對岸の雀のお宿を訪ねようといふのてあ

る。

「お坊つちやん、早くお歸り、今夜はわたしがだいてあげるぞなも。」

「いやだ、僕、北原白秋と寢るんだ。」

「へへえ、この子はん、變つてやはりますなあ。」

自動車が走り出した。

雀のお宿の素峰子は、自ら行乞子と稱してゐる。かつては書店の主人であつたが、愛妻の病沒により、哀傷の極は發願して、奮つて無一物の眞の淸貧に富まうと努めた。一燈園にもはいつた、その木曾川橋畔に現在の學園を創立するまでの辛苦は並々でなかつたらしい。たゞかうした事業は氣を負ひやすいものである。過ぎれば俗情の禍が來る。童ケ丘がどれほどの童ケ丘に

なりきたつたか。この機會に親く觀て置きたいと私は思つたのである。

雀のお宿の位置は笠松の對岸になる。低い砂丘のその松原は豫想外に閑寂であつた。松ケ根の萩むら、孟宗の影の映つた萱家の黃いろい荒壁、機の音、いかにも昔噺の中の鄙びた村の日ざかりであつた。莚などしきちらして、郵便配達夫までが仰向けに晝寢してゐる。その傍に杉の皮で葺いた風流な門があつた。額には靑い字で掬水園と題してあつた。緣側や見透しの狹い庭には男女の村童が群つて遊んでゐる。玄關の左には人間愛道場掬水園の板かかゝり、ふり仰ぐと雀のお宿の大字の額に延命十句觀音經まで散らして彫り、右には所用看鐘として竹に鐘がつるしてあり、下には照顧脚下と書してある。

けだし寺であり、學園であり、在家であるといふのだらう。たゞ趣味として

の風雅が形式として勝ち過ぎる。寧ろ飾らぬがよくはないかと私はいつた。佛間が教室で良寛和尙を齋ぎ、小さな圖書室が表に、裏には琅玕莊の別棟がある。琅玕莊では男女の小學教師たちが二三十人ほど集まつて私を待つてゐた。私は民謠や童謠の話などをして、すぐとまた席を立つた。

松林にも腕白らが騷いでゐた。良寛堂の敷地には亭々たる赤松の五六がちやうどその前廂の斜に位置して、そのあたりと、日光と影と、白砂と落松葉と、幽寂ないゝ風致を保つてゐた。

「こんないゝところが、對岸にあらうとは思はなかつた。」と四季の里の主人も感嘆した「とにかく、よくこれまでにやりとほして來た、見あげた。」と私も微笑した。然し、これからが大事である。形式が精神を超えると名利の家と

なる。「素峰、これからやかましくいふぞ。」と私は笑つた。

私たちは桑畑と松林の間を木曾川の左岸に出た。また松林があつた。テントと投水台と。

西には養老の山脈、遙には伊吹山、北には鐵橋を越えて、岐阜の金華山、幽かに御嶽。つい水の向うが四季の里の百日紅。

「さあ、これから歸つて一杯差上げますて。」とその老主人公がさつさと踵をめぐらした。

藤棚の多い四季の里の一夜の饗宴には土地の警察署長や農會長、舊知の歌人の默々子などが加はつた。私たちは幾度か庭の茶亭から茶亭へ席を代へ代へした。夜がふけて私はたつたひとりて仰向きに胸や腹をつん出して眠り

ころげてゐる隆太郎の蚊帳にもぐりこんだ。さうして、そのてつかちな毬くり頭をはづれた枕へ持ちあげ、借着の寢衣の前を深く深く合せてやると、そのまゝぐつすりと眠つてしまつて、すぐと河霧の白い白い夜あけが來た。

私たちはその翌日、養老へ立つた。そこて二泊、名古屋に引き返して一泊、それから惠那へ行つた。

四

八月十二日、午後五時。

惠那峽口は遊船會社附近の鐵橋風景である。對岸に簡素な二階建ちの洋館が一つ、淸流を隔てたこちらの土手の雜木、草藪、岸には空色に白のモータ一・ボート、赤い線のEのフラフをひるがへした屋形船。それに乘り込んだ私たち一行——私と隆太郎と同伴の素峰子、その義弟のT少年、それにその地の「山峽」の歌人たち七八子——てある。肉いろの、綠の、桃いろの、バラソルを疊んて、水際に蹲つた浴衣の女學生らしいのが二三人、これらは私たちの連ではない。たま〳〵雲のごとく水鳥のごとくに現れて、この風景を明るく可憐に點彩したまてのことてある。

舊曆は盂蘭盆の十五日、ちやうど今夜は滿月である。空ははれ、風は爽かに、日の光は未だ强い。その良夜の前の二三時間を慌たゞしい旅の心が騷めき

やまぬ。驛から驛への電話が、この中津川で行先不明の私たちをやつと捉へると、直にも引き返さねばならぬ重大用件を取りついだのである。で、上流の福島や寢覺の床採勝の豫定も中止すると、どうでも明十三日の朝には此處を立たねばならなくなつた。て、日の暮までの僅な時間を屋形船はモーター・ボートのぽッぽッぽッに曳かせて、大急ぎで惠那峽一帶を乘り廻らうといふのである。

席が定まつてから、「おや、あの印刷屋さんはどうしたね。」と、私は驚いて笑つた。多治見にいち早く私たちを出迎へてくれて、それから中津川に着くまでの汽車中を分時も宣傳の饒舌を絶たなかつた、いささか豸へんの惠那峽人Yといふ、鼻の白くて高い痩せ形の熱狂者が、いつのまにか搔き消すやうに

ゐなくなつたものである。

「あはゝ、またお出迎ひてさあ、何でも活動の撮影團が來るとかいつてましたから。とても夢中で。」

とその從兄の民謠詩人がツルリと禿上つたその前額を指で彈く。

「ほう、いそがしいね、愛鄕心もあそこまで行けば命懸けだ。」

何でも八景投票の惠那峽の騷ぎといふものは凄じかつたらしい。うつかり惡口でもいはうものなら殺される。

と、雲と山と水との四圍の風景が走り出した。

「やれ飛べ觀音といふのは。」

「もつと上です。惜いことしました、ゆつくり御案内できないで。」

光る、光る、光る、光る。銀、銀、銀、銀の水面、水面——水面。

「あれが御番所の森です。」

幽邃な左岸の林に釣人がゐる。一人、二人、三人、四人。麥稈帽で半シャツ、かゞんで、細い棹の糸をおなじくしんかんと水に垂らしてゐる。木の影が老緑色に澄んで、ぴちりぴちりと何か光るけはひがある。鯉や鮠を釣るのだといふ。あの森にはまた鶴が棲んでゐたこともあつたと誰かがいつた。木曾谷の下る筏を見張つた御番所の跡であるらしい。

苗木の城趾はこれに對して高く頂上の岩層にうら寂びた疎林がある。日本唯一の赤壁の城の趾があれだといふ。この淵の主である蟠龍が白堊を嫌つたといふ傳説がある。

私は「惠那峽舟遊案内」と見較べ見較べ、いそがしい、いそがしい。

風、風、風、風。

光る、光る、すばらしく光る朴の葉裏である。

翠巒、翠巒。

下手の空際に高壓線の鐵塔が見える。大同電力のダムで堰かれた河流は百八十尺の高さにその水深を増したといふのだ。

風、風、風、風。

水は波は、ともすると逆流する。河といふよりたんたんと湛へた湖水の面である。兩岸には、木の梢や、思ひもかけぬ枝の半上などが水に露はれて、さながら洪水にひたされた林相である。かうして急流は變じて深潭となり、

山峡の湖水となり、岩はその根を沒して重疊奇峭の趣を少からず減じてしまつたと聞いた。然しながらその爲にまた水は紺碧を加へ、容量は豐富に深沈たる山中の幽寂境を現出した。

この惠那峡は木曾川の中流である中津川驛の傍から大井町に至る水程三里の間にあつて、岐蘇溪谷中の最勝の奇景であるといはれてゐる。日本ラインの奇岩怪石は多く相迫つて河中聳立するが惠那峡の岩石美は寧ろ山上にあり千仞の懸崖にある。

「あれが青崖。」

眼を遮るは濃青の脈々たる岩壁である。その下の鞍掛岩。その左は展けた下流の空の笠置山。雲だ、雲だ、雲だ。

右には武光岩、鬼岩、蟇岩、帽子岩、たゞ見あぐる岩石の突屹相、亂錯相、飛躍相、蟠居相、怪異相、趺坐相々々である。點綴するには赤松がある、黒松がある、矮樹がある、疎林がある。

光る、光る、光る、光る朴の葉裏である。

ぽッぽッぽッぽッ、煙、煙、煙。

「や、あれが月待ヶ丘です。」

「今夜の滿月はさぞいゝだらうな。」と私はその丘の空際をふり仰いだ。それにしてもあまりに慌たゞしい舟の速力である。

「誰か踊らないか。」と一人がビールをあほつた。

「あ、あれが村雨の瀧です。」

峽中の美橋、美惠橋が現れて來た。一名禪橋といふのがそれだ。禪の節約と馬糞の拾集とから得た利益を積み立てゝ架橋したのが大正三年の洪水で流失した。

「禪橋が落ちた。」と歌つたものです。」で、みんなが笑ひ出した。今のは鐵橋。

「山峽」同人の指呼はいよいよ急がしくなる。天狗岩です。ほら、枕石だ、後阿彌陀岩だ、砲台岩々々々。

そこで品の字岩といふのが眼界に聳えて來る。文字どほりの角の巨岩が相對し重積して、懸崖の頂きにあるのだ。たゞ私にはさうした奇趣に興味を持たぬ。畫とし詩とするには索然たるものがあるからである。

その本流と付知川との合流點を右折して、その支流一名綠川を溯航する舵に、早くも照り映つたのは實にその深潭の藍碧であつた。日本ラインにもかつて見なかつたその水色のすさまじさは、まことに深沈たる冷徹そのものであつた。山中において恐らくいかなる湖面といへどもこれほどの水深を藏する凄みは少いであらう。大同ダムで堰き止められて、本來の懸崖の三分の一以上、二百仞も高く盛り上つたその水際には、すなはち現實における魚は綠樹の梢にのぼり巉岩は河底の暗處に沒して幽明さらに分ちがたい。しかもまた峭々として相迫つた岩壁の間に翼を休めた蒼い蒼い眞上の空の一角である。雲は白く綿々として去來し、繼氣はふりしきる蟬の聲々にひとしほに澄みわたる、その峽中に白いボートを漕ぐ白シャツの三五子がゐる。この奇異な對

照こそ寧ろ觀るべからざるを觀る一種の戰慄をさへ感ぜしめる。

朝鮮金剛の勝に私たちは當面したのである。この溪谷のいさぎよくして閑かな、またこの重疊たる岩峭の不壞力と重壓とは極めて蒼古な墨畫風の景情である。夫婦岩、蓬萊岩、岩戸不動瀧、垂釣潭、寶船、重ね岩、寶塔等々々の名はまたあらずもがな、眞の氣魄はただに天崖より必逼する。

安子穴といふのがあつた。白狗と白馬との天正時代の傳說がある。後、お安といふ女人が零落してこゝに玉のやうな童子を育てた。以前は岸邊傳ひからどうにか上れたであらうところも今は變じて湖上の絕壁となつた。

船止めの葦毛潭から引かへして本流に出る。

源齋巖が左に、對つて高く聳つ天柱岩がある。このあたりから丘陵の間は

やや斜面に展けて赤松の細い幹が緣邊に林立し、怪奇な岩層の風致に一種の纖細味を交へてゆく。對松崖はこれと映照する。

續いて、私たちの屋形船は屏風岩の岩壁にひたひたと舷を寄せた。朝鮮金剛の勝以上の大觀である。參差たる松ケ枝、根に上り、横に匍ひ、空にうねつて、いふところの松籟般若を彈ずるの神境である。

巒氣と水光と變幻する雲、雲、雲。

右には蕭々たる瀧がある。あ、水車がある。釣人は幽かに棹をかついて細い徑をのぼつてゆく。

簡素な別莊がある。近代の料亭もある。

鉦鼓淵、盜人谷、その天上の風格は亭々と聳立する將軍台、また嚴として

平なる金床台。

金色の日光。

と、展望がこゝで明るくなつて左に船着場があつた。エの朱線のフラフ、屋形、モーター・ボート、輝く波々、棧橋の童、風、風、風。

木の間がくれの茶亭の下へ、さて上つて、ズボンの釦をはづす男もゐる。

その正面こそ大同電力の白い白いダム堰堤である。古典的の幽邃と奇峭とはこゝに轉變して、近代の白と灰銀との一大コンクリート風景を顯現する。水はまゝまゝとして、そのダムに堰かれて湛へ、橋梁の連燈はまだ白く玻璃球のみ光つて、丘陵の上、また水邊に反照する鮮明なる洋風建築、このダムこそ東洋一の壯觀だとせられる。その堰堤の高さ百八十尺、長さ一千尺コン

クリート、貯水量十億立方尺、堰堤上流三里十二町、面積百七十一町、水量流域百二十三方里、發電機四台、勵磁機二台、電力四萬二千九百キロワット。惜しむらくは下流に立つてこれを仰視し得る機會を得なかつたことである。

私たちはその壯麗なるダムの前の廣々とした湖面を一周して、さて、いよいよ歸路についた。急速力でである。

遊船會社の前の峽口は高い高い白い石の橋台に立つて、驚くべき長い釣棹を垂れてゐる人影も見えた。橋の下にも幾群か糸を投げて魚を待つ影も見えた。

夕燒けが來た。さわりさわりとその肩の長い棹を弧に、その先きを線路につけて、その鐵橋の枕木の上を拾ひ拾ひ渡る男も見えた。

私たちは上つて、撮影をすると、すでに灯のともつた臨時電車にぞろぞろと乗り込む、走る、走る、走る。

私は思つた。惠那峽の幽邃はともすると日本ラインの豪宕を凌ぐ。こゝまで上つて來なければ木曾川の綜合美は解せられない。すばらしい、すばらしい。

さて散策して見た中津の町は電飾が鮮かではあつたが、いかにも北國の小都市らしく、簡素で、また陰暗たるところがあつた。

その晩、梅信亭で饗宴が催された。この町の若い美妓が輪になつて、そこで、紅い頭巾に花笠、裁付袴のそろひで、本場の木曾踊りを踊つた。だがあまりに巧緻に過ぎ、柔軟に過ぎた。「民謠とはそんなもんぢやない、おうい、

俺が御手本を示してやる。」私も醉つてゐた。隣室に飛び込むと、それ何、それ何、それ何といふ騷ぎになつた。

紅い頭巾で、背中に花笠で、裁付袴で、やあよいかとゆらりと出て行くと、若い町長初め、一同がやんやと拍手した。

そこで、ちよつと紅い頭巾のあたまを搔いて、私も笑ひ出した。大膽といふより無鐵砲なのだ。

「おうい、坊や、いつしよに踊らう。ヨイヨイヨイのヨイヨイヨイだ。」

この夜こそ舊曆の盂蘭盆であつた。明るい明るい滿月である。（完）

別府温泉

高濱虚子

一

道路のアスファルトがやはらかくなつて靴のあとがつくといふ灼熱の神戸市中から、阜頭に出て、舷梯をよぢて、紅丸に乗ると、忽ち風が涼しい。

こゝから神戸市中を振り返つて見ると、今まで暑さにあえいでをつた土地

も、涼しげな畫中の景となつて現れて來る。さうしてその神戸阜頭が今はもう視界から去つてしまふ頃になると、左舷には淡路島が近より、右舷には舞子、明石の濱が手に取る如く見えて來る。私は甲板の腰掛に腰を下して海風の衣袂を飜すに任してゐる。

先に帆襖を作つて殆ど明石海峽をふさいでゐるかと思はれた白帆も、近よつて見るとかしこに一帆こゝに一帆といふ風に、汪洋たる大海原の中に眞帆を風にはらませて浮んでゐるに過ぎない。

それに引かへて往きかふ蒸汽船の夥しきことよ。鐵甲板の荷物船が思ひきり荷物を積んで、深く船體を波に沈めて、黑煙を吐いて重さうに進んでゐるのもすでに三四艘ならず追ひ越した。輕快な客船も、わが船の十三ノットといふにはかなはないで暫く併行して進んでゐるうちに遂にあとになる。向うから來る汽船はすれ違つたと思ふうちにもう見えなくなる。すべてこれ等の汽船は坦々たる道路の如くこの海原を航行してゐるのである。

さすがに白熱の太陽が大空に君臨してゐる間は、左右の島も汪洋たる波も、その熱に燒きたゞらされて、吹き來る風もどことなく生暖かい。その風は裳裾や袂を飜し、甲板の日蔽をあふち、人語を吹き飛ばして少しも暑熱を感じさゝないのであるが、それでも膚に何となく暖かい。

太陽が小豆島の頂きに沈みかける時が來ると、やがてこの船の極樂境が現出するのである。今まで青黑く見えてをつた島々が薄紫に變つて來る。日に光り輝いてをつた海原に一抹の墨を加へて來る。日が小豆島の向うに落ちた

と思ふと、あらぬ方の空の獅子雲が眞赤に日にやけてゐるのを見る。天地が何となく沈んで落着いて來る。と、その海の上を吹いて來る風が、底の方から一脈の冷氣を誘うて來る。その冷氣が膚に快よい。

暮色が殆ど海原を蔽ひ隱す頃になると、小豆島の燈台が大きくまたゝきそめて、左手には屋島の大きな形が見えそめて來る。もう高松に着くのに間がないことを思はしめる。

後甲板に活動寫眞をしてゐるのを見に行く、寫眞のうつる布が風に吹かれてゐるので、映寫は始終中はためきどほしである。

高松の阜頭に着く頃はもう全く日が暮れてゐる。紅丸がその棧橋に横着けになると、忽ち澤山の物賣りが聲高くその賣る物の名を呼ぶ。

「この棧橋は鐵筋コンクリートで出來たもので、恐らく日本の棧橋のうちて一番立派なものでせう。」と事務長が話した。その棧橋の兩側には三艘ばかりの船が着いてゐる。先きに途中で追ひ拔いた木浦丸も後れてはいつて來る。船全體が明るくともつて、水晶珠のやうなのが一艘をる。これは宇野と高松との鐵道連絡船の玉藻丸である。

船が棧橋にとまつてゐる間は風が死んでむし暑い。やがて棧橋を離れて大海原に浮むと又涼風が膚にしみて寒い位である。私は臥床にはいる。朝七時半起床。もう佐田の岬がそこに見え、九州の佐賀關の久原の製煉所の煙突を見る所まで來てゐる。

朝影のある甲板は涼しい。

別府はもう眼の前にある。

觀海寺は彼處、商船會社の支店は其處、とボーイが指さしてゐるうちに棧橋に着く。

すぐ自動車で龜の井旅館に着。温泉にはいる。

別府は土地の下一面に温泉である。それが第一の天惠である。瀬戸内海といふ大道路がすぐ玄關に着いてゐる。これも天惠の一つである。

温泉に入るや瀬戸内海の晝寢覺。

この前來たのは大正九年であつたから、今から八年前になるが、出迎へてくれた土地の人は、

「別府も八年前とは大變變りました。」と誇り顔にいつた。紅丸の甲板から別府市外を概觀した時は格別變つたやうにも思はなかつた。棧橋から龜の井旅館に來る途上の光景も格別變つたやうにも思はなかつた。が、たゞ私の通された所は洋館のホールであるだけが變つてゐた。

「何時建て增しをしたのです。」と聞いたら、

「一昨年一月でした。」と答へた。

その夕方五時から日名子太郎氏や市の温泉係の中島辰男氏に案内せられて地獄廻りに出掛けた。

先づ海岸通りを北に自動車を驅つた。道幅がこの前通つた時より廣いやうに覺えた。

「この道は新らしく作つたのですか、大變廣いやうですが。」と聞いて見たら、

「大正十年に作つた八間幅の道路です。」と答へた。それから又、

「この上の方の鐵輪温泉から鶴見の方へ出る三間幅の道路も新らしく出來ました。各地獄や温泉を連絡する新道路が出來たのであります、皆自動車で通れます。」とのことであつた。

この前、日名子氏に案内されて地獄廻りをした時は、人力車でなければ通れなかつた。所によると徒歩でなければ通れなかつた。それも、朝出掛けて遂に鐵輪温泉に一泊して、二日がゝりであつたことを思ふと、夕方の五時頃から涼みがてらに自動車に乘つて出掛けるなんか、隨分變化したものと思つた。

先づ龜川温泉を過ぎて血の池地獄を見た。十年に一度大活動をはじめるさうで、今年が丁度その十年目に當たり、大荒に荒れるさうである。今朝も大活動をやつたとのことである。ほとりの樹木など澤山に枯死してゐるのはその熱泥を吹き上げた處である。赤い泥の沸々と煮え立つてゐる光景は相變らず物すごい。

次ぎに竈地獄を見た。これは地中の鬼がうめくやうな聲を發して、岩窟の中から熱氣を吐き出してゐるのである。その熱氣で蒸したアンコのないまんぢうがおいしかつた。

芝石温泉といふ、湯瀧のある、谿谷に臨んだ温泉を過ぎて、紺屋地獄を見

た。これは紺色をした泥池の底から、同じく怒るが如くつぶやくが如く熟氣を吐いてをるのである。驚くべきことには近所の青田の中にも數ヶ所同じやうな處がある。一歩誤ればその中に落ち込んで命を落さねばならぬのである。現に誤つて死んだといふ人も澤山あるのださうである。雞卵をその泥土からわく湯氣に置くと二三分で半熟になり殼が眞黒になる。その眞黒な雞卵を一つ食べて見た。

次に坊主地獄を見た。これもやゝ大きなにごつた熱湯が沸々とわき上つてゐるのである。その有樣が澤山の坊主頭を並べてゐるやうだからその名があるのだともいふし、又昔圓内坊とかいふ坊さんが二重桝をつかつて百姓から米穀をむさぼり取つたがために、一夜の中にその邸宅が陷沒して、この坊主

地獄が現出したとの傳説もあるさうである。後ろの山に圓内坊十五尊像といふ半ば壞れた十五の石像がある。こゝは豐後灣を見晴らして景色がいゝ。かつて遊んだ日出の人家も一眼に見える。アンコのあるまんぢうがまたうまい。

次ぎに地獄中の女王、海地獄を見た。この地獄については別に記述するところがあらう。地獄中の最も大きなもの、又最も美しいものである。もうこの海地獄にある間に七時を過ぎた。

それから鐵輪温泉に行つた頃は店頭の電燈がともつてゐた。そこで鐵輪地獄といふのを見た。この鐵輪地獄といふのは以前來たときはなかつたので、その後地下を掘つてゐると俄然として爆發したので新らしく地獄が現出したのださうである。

この地獄には吸入室とか奄法室とかの設けもある。

そこでちよつと以前泊つたことのある富士屋の主婦さんを訪ねた。もとの通り太つてゐることは明かだつたが、顏かたちを十分に識別することは出來ないほどに薄暗くなつてゐた。

夜路をひた走りに走つて鶴見地獄に出た。この鶴見地獄といふのも昨年の春から爆發したものださうである。泥土を交へない淸透な熱湯を噴出してゐる。

別府はこの前來たときよりも變つてゐることは明かになつて來た。二大地獄の新たに增したことだけでも爭ふことの出來ぬ著名な變化である。

土地を掘つて溫泉を出すといふことは、別府では隨所に行はれてをる。別莊

地などは一軒の小さい建物にも必ず溫泉がついてゐる。

別府の停車場には溫泉の洗面所がある。小學校にも溫泉の浴槽がある。警察にも同じく溫泉の浴槽がある。溫泉が空しく噴き出して夏草の上に流れてゐるところは各所にある。

田の中に小さい小屋がけがしてあるのは何のためかと思ふと、皆そこには溫泉が出てゐるのである。溫泉の出てゐるといふことを榜榜して、そこを別莊地に選む顧客を待つてゐるのである。さうして掘ぬき井戸を掘るやうな裝置が至るところにしてあるのは、皆新らしく溫泉を掘つてゐるのである。

その掘つたところが俄然爆發して大量の熱氣を地上に噴出するやうになつたところが、新らしく出來た鶴見地獄や鐵輪地獄である。

温泉の數はかず限りもない。温泉場と名のついた別府、濱脇、觀海寺、龜川、鐵輪、芝石、掘田、明礬、新別府などがある。別府市内だけでも浴場が十あまりある。その他旅宿や個人の家には數限りなく温泉が湧出してゐるのである。

或人は今の別府は南の方に僻在してゐる、龜川の東にある實相寺山を中心として、大きな泉都を建設せなければならぬといつてゐる。或人は別府のうしろにそびゆる四千五百尺の高峰鶴見嶽を中心にして、各所に點在する温泉鄕を連結せなければならぬと説くものもある。

地熱を應用してすべての動力の基本としようとする地熱研究所といふのがある。これは高橋廉一氏の監するところである。その結果がよいところから、

東京電燈が玖珠郡飯田村湯坪に又地熱研究所を設置してゐる。

温泉栽培株式會社といふものがある。これは温泉の熱を利用して果物を栽培しようといふのである。

又地球物理學研究所といふのがある。これは京都大學がこの研究所を設けて温泉に關する基本的調査を開始してをる。

外に温泉療養研究所といふものが、九州大學により新たに開始されんとしてゐる。これは醫學の方面から温泉を研究しようとするのである。

海軍療養所もあり、鐵道療養所もあり、滿鐵療養所もあり、台灣婦人療養所もある。

海岸には砂湯といふものがある。これは潮の引いた時分に、その砂濱に五

體を埋め、下から湧出する温泉に浴するのである。日本人はもとより西洋人、支那人なども同じやうに砂に埋まつてゐる。妙齡の婦人もある。手足の萎えた老人もある。

それのみならず、この別府の海には底にかず限りもなく温泉が湧出してをるらしい。その證據は海底の水が暖かくて、熱帶地帶の海にゐる美麗なる魚介の類が棲息してゐる、それらが採取されてこゝの魚市場に出るとのことである。陸地至るところに温泉の湧くことを思へば、それも無稽の説といふことは出來まい。

のみならず、海水浴をするのにも、潮はあまり冷めたからず、快適の温度であるとのことである。

豐後灣の風光は美しい。こゝから日出を眺めた趣などはナポリに似てゐるとの評判がある。

何にせよ別府の大いなる强味は地下盡く温泉であるといふことである。土地の人は泉都と唱へて、日本の別府でない、天下の別府であると誇つてゐる。泉都といふ言葉は面白くないが、湯の都たることは首肯される。

然しながら、觀海寺は觀海寺土地株式會社といふものゝ經營に移つて、同じくその經營になる住宅地が、夏草を生やしつゝ澤山に客を待つてゐる。文化村といふ新住宅地も五六軒新しく建つたまゝて人の住むのを見受けない。海岸の風光を台なしにした埋立地にも別荘が建つたまゝて未だ買手のないものが多い。海地獄の熱湯を引いた新別府の土地株式會社といふものも出來てを

る。これもあまりはかゞしくないやうだ。不景氣風に吹きまくられて湯の都の發達もちよつと小頓挫の形にある。

別府市と温泉、地獄の散在してをる附近の村との連絡が思はしくないやうである。これは温泉地一帶を別府市に編入して一つの行政區域にしたいものである。各地獄の遊覽に一々料金を取るが如きも廢止したいものである。これも個人の有になつてをるために不便である。大別府を建設するためには第一着手としてこれ等は市有とすべきであらう。

二

午前六時に眼ざめて顏を洗つたばかりで、飯も食はずに自動車に乘つて、私は五里の山里を由布院村へと志した。龜の井主人油屋熊八氏東道のもとに、日名子太郎氏、滿鐵の井上致也氏、大阪毎日別府通信所の本條君と共であつた。

鶴見の山背を越える頃になると由布の峰がボカリと現れはじめた。豐後富士の稱があるだけあつてその尖峰が人の目をひく。富士なれば、誰かの繪で見た扇をなかばたゝんで倒さに立てたやうな景色であつた。その富士をうしろにして展望すると、すぐ天の一角に海を見て、佐田の岬、佐賀關あたりがほゝふつと見える。又はるかの雲際に祖母山脈、又それに並行した二三の山脈を見はるかして景色がよい。それからしばらくの間は變化のない山路で、

やがて小田の池、山下の池などを見、放牧された牛の行手をふさぐことなどがあつて、漸く下り路になつた。

「時間が後れると靄が晴れてしまふ。」と熊八氏が心配してゐたが、山路が開けて一帯の谷を見渡した時に、

「あゝ靄はもう晴れてゐる。」と落膽した。それでも一抹の濃い靄はなほ白くその邊を逍遙うてゐた。これが由布院村であつた。

取りあへず龜の井別荘の龜樂園に憩ふ。この別荘は瀟洒たる小さい別荘であるが、竹縁に腰を下ろして仰ぐ由布の尖峰は類なく美しい。前面は斧の入らぬ茂つた山で、その圓い山の肩のところから突として起つた二つの尖峰——こゝからはその峰が二つに別れて見える——が青空にそびえ立つてゐる樣

はゑがくが如く美しい。

この由布院村にもたくさんの温泉が湧出してをる。現にこの別荘のすぐ傍に錦鱗湖といふ池があるが、その池の岸邊にも温泉が湧出してをつて、その岸邊の水は温かいとのことである。

その錦鱗湖に行つて見たが、池の形も人工が加はつてをらず自然で、澤山の浮草の生えてゐるさまも面白く、又岸にある藁家の重なりあつて建つてゐる樣も面白かつた。

私たちはこの別荘で熊八氏の用意してくれたサンドウヰッチを食し、やがて又自動車に乘つて、更に六里の山路を越えて、飯田高原に行くことになつたのである。

路は前の山路よりも更に悪くつて自動車の動揺がはげしい。二三里も來たらうと思ふころ、お花畠ともいふべき秋草の咲いてゐる所に出た。女郎花、撫子、女郎花に似て白い花（男郎花とも違ふ）それにあざみなどが咲き滿ちてゐるさまが美しかつた。

崩平といふ山を一巡すると湧出山といふ山が見え出す。續いて九重山、久住山、大船山、黒岳などといふ山が前面に現れた。恰も列座の諸侯を見るやうな感じで威風堂々と並んでゐた。九重山といふ山は白く欠き取つたやうになつてゐた。これは硫黄をとつてゐるためであつて一名硫黄山といふさうである。黒岳といふのは自然林の密生してゐる山で、他の山々と違つて格段に黒いのが目に立つ。これらは總て九州アルプスといはれる山であるさうだ。

その前面に現れ來つた高原が卽ち飯田高原である。

その飯田高原は奥行二里幅三里ほどあつて、一千町歩が水田になつてゐるほかはすべて小さい熊笹の生ひ繁つた高原である。自動車は路でないその熊笹の生えてゐる所を自由に突破して走りもするのである。石が殆どなく、いづこでも取つて路とすることが出來るのである。馬に乘つて里人が通つてゐると思へば、自動車は路をそれて行くことが出來るのである。そんなところが二里も三里もつゞいてをるのである。

ある溪谷に沿うて白楢、山梨などゝいふ大木の枝に掛け出しが架けしつらへてある。これは熊八氏の工夫になつたものである。そこで晝辨當を開いた。

こゝらあたりにも又澤山の湯がわいてをる。湯坪といふ村には筋湯、大岳

地獄、疥癬湯、河原の湯、田野といふ村には星生の湯、中野の湯、寒の地獄、筌の口温泉といふのがある。この辨當はその筌の口温泉の小野屋といふ旅館の主人がこしらへて來てくれたのである。その主人は馬に乘つてこの高原を横切つて來たのである。

歸りに寒の地獄といふところに行つて見た。これは冷泉であつて、普通の水よりつめたく、なかにはいると齒の根も合はずふるへるやうにつめたい。男や女の色青ざめて入つてゐるのを見た。冷却して病を治すといふ方法もあることかと思うた。

ゴルフ場や飛行機の着陸場はすぐこゝに出來るやうにならうといふ熊八氏の氣焔を聞いた。こゝには熊八氏の五萬坪ほどの別莊の敷地がある。

錦鱗湖

萍の温泉の湧く岸に倚り茂る
自動車を下る
夏草に油蟬なく山路かな

早

大夕立來るらし由布の搔き曇り

別府の地下は泉脈が縱横にあつて、熱汽、熱沼、熱湯を噴出するものを地獄といひ、適度の温度を保つて湧出するものを温泉といつてゐる。その地獄に血の池地獄とか、鶴見地獄とか、紺屋地獄とかいふのがある。これは熱汽、熱泥を噴出する地獄である。海地獄はそれらの地獄とは異なりて大きな池に

熱湯をたゝへたもので、その色青藍、大海の色に似てゐるところからこの名がある。

海地獄は地獄のうちで女王の感じがある。それも他に王様があつての女王でなく、たくさんの他の地獄の悪鬼羅刹を自ら統率してをる女王の感じである。

その青藍色の湯池は蠱惑的である。美しさの余り眩惑されて身を投じるものもないとは限らぬ。又十分の威嚴を備へてをる。百廿度の熱湯は儼として人を近寄らしめない。正に女王の感じである。

私の日名子氏等と共にこゝに行つたのは六時半を過ぎてゐたらう。濛々たる白煙は熱湯池から立ち上つてゐた。此方より風吹けば彼方の岸になびき、彼

方より風吹けば此方の岸になびく。その白煙の隙から後ろの山の翠色を仰ぐのも又風情がある。後ろの山もまた整うたたゝずまひてある。盛装した女王の衣冠の趣がある。

そこの番人をしてをる水戸の藩士の娘で薙刀の上手なといふ尼子敏子さんに聞いて見る。

「小鳥が鳴いてゐるやうですが、あれは何鳥ですか。」

「ひゝわです。他の小鳥もをりますがひゝわが一番多うございます。」

語るもの聞くもの森閑とした景色に耳を澄ます。

「ほとゝぎすも鳴きますか。」

「鳴きます。」

暫く話がとだえてをつたが敏子さんはなほつけ加へていつた。

「この春はきじが二羽巣食うてをりましたが、いつの間にかゐなくなりました。」

「花はどんなものが咲きます。今咲いてゐるのは合歡の花ですね。」と夕暮の山を見上げていつた。

「さうです。それに山櫻が多うございます。これからさきは櫨紅葉が美しうございます。」

この地獄でゆでた鷄卵を食べて見てくれとのことで一つ食べて見た。店の少女が私たちを見て鷄卵をざるに入れて前の熱湯の中につけた。それが一二分でもう半熟になつたのである。

貝原益軒の豐國紀行に、

その西の山際に海地獄とて池有。熱湯なり。廣さ二段許り。上の池より湧き出。上の池廣さ方六間許。その邊岩の色赤し。岩の間よりわき出づ。見る者恐る。先年里人妻その夫といさかひて大にいかりしがこの熱湯に身をなげけるに、やがて身はたゞれさけて、その髪ばかり浮び出。豐後風土記曰、速見郡赤湯泉。この温泉も宍郡の西北竈門山に有。その周り十五丈斗。湯氣赤くして泥土有と卽ち海地獄の事なるべし。

とある、赤い泥土であつたのが、今は澄んだのか、或はまたこの赤温泉は今の血の池地獄をいふものか、兎に角風土記は延長以前の書物といふことであれば、今から千年以前のものであるから、どう變化したかわからない。益

軒の紀行文にも岩の赤くなつてゐることが書いてある。特に湯の清澄なことは書いてない。たゞ熱湯の恐るべきことを感じて湯の清澄なことを感じなかつたのか、若くはその時分は湯は多少濁つてをつたのか。

夫婦喧嘩をして怒つた女が飛び込んだのが死骸もとめずにたゞ髪だけが殘つたといふのは物すごい物語りだ。今でも轉落して死ぬものがあるとのことである。また自ら死するのにこの美しい湯池を選ぶものも皆無とはいへまい。

三

この前來たときこんな印象が頭に殘つてをる。

それは日名子氏に案内されて街の中のどこかの共同温泉場を見に行つたとき、私たちの目の前には一人の若い女が現れた。それは裸のまゝで、腰にタオルをまいて、今湯から上つたところであらう、草臥れてぐつたりしたやうすで、そこの縁に腰をかけて、後ろの羽目板にもたれかゝつてゐるところであつた。さうして手に水蜜桃を持つて、ぢつとその上に目を落してゐるところであつた。この女は西洋繪で見たことのある裸體の女がぬけ出して來たのかと思はれた。が、しかしそんなハイカラな女ではなく、この別府の温泉にふさはしい野趣のある一人の女であつた。私はその後別府の町の温泉を思ふと、この女を思はずにはをられなかつた。

こんど別府に來て案内記を讀んで見ると別府の町の温泉は宏壯なる建築だと書いてある。その桃の女がゐた温泉は板で圍つた古い温泉であつたやうに思ふ。もしかするとその板で圍つた温泉は取り毀はされて、それが宏壯な温泉に變つてゐるのかも知れない。

地獄を案内してくれた日名子氏が今夜又町の温泉に案内してやらうとのことであつた。

もう九時まで待つたが日夜子氏は來なかつた。私は寢床に入らうと思つた。新らしい町の温泉に桃の女はもうゐないにきまつてゐるから。

別府の町は今日から祭禮である。きのふまでは宿のすぐ下の家で祭囃しの練習に余念もなかつた。寢床に入つて後までも祭囃しは聞こえてをつた。今日

は却てその囃しは聞こえない。先刻どこかで花火が揚がつた。あれも祭の花火であらう。

そんなことを考へてゐるところへ日名子氏が見えた。この町の舊家でしかも前の別府町時代の町長であつた日名子氏はお祭りの行列についてあるかねばならなかつたので、たいへん遲くなつたといつた。八年以前も案内に立つてくれた日名子氏にこの桃の女の話をすると、

「あれは龜川の四の温泉でした。」といつた。それを別府の温泉と思ひ違へたのは、八年の昔のことで記憶がおぼろになつてゐたゝめである。

その翌日であつたが海岸の樓上で祭禮を見た。それは一つの船には神輿が乘つてゐて、一人の男が妙な體の恰好をして太鼓を打つてゐた。その他にも

男がゐたが皆靜にしてゐた。その他の船には矢張り太鼓を打つてゐる男が一人ゐて、その他の男は皆船を左右に動かしてゐた。船に殆ど水がはいる位に左右に動かしてゐた。船には旗が飾り立てゝあつたが、その船が左右にゆれるたびに旗が仰山に左右にゆれた。そんな船が前後に五六艘もあつて、かの神輿の船を取り圍んでゐた。これは濱脇にある金刀比羅神社の神體が海上を渡御してゐるところであつた。

海岸にはその渡御を見んための人々が蟻のはふやうに群集してゐた。やがてその船は皆波止場の中にはいつてしまふと群衆も漸くその波止場の方に移つて行つた。

日がくれてしまふと一面の闇が海上も海岸の建物も隱してしまつた。たゞ

平等に眞暗な天地となつてしまつた。その中に灯火のみがきら〳〵としてゐた。海岸には一帶の灯があつた。水晶のすだれのやうな灯のかたまりが港を圍んでゐた。その中に篝火が燃え立つて、特に煌々と光り輝やいてゐるものゝ動いてゐるのは何かと見ると、それは神輿であつた。最前船に乘つて渡御しつゝあつた神輿が今は陸上に上げられて舁かれつゝあるのであつた。群衆のそれを取り圍んでゐる容子がその篝火の光に照し出されてゐた。

海の上にもまた灯火が散らばつて動いてゐた。それは多くは赤い火であつた。目の下にも一隻のボートに赤いほゝづき提灯をともして漕いで行くのがあつた。聞けば澤山の温泉旅宿の番頭や女中なども十二時を過ぎると皆このボートに乘つて海上に遊びに出るとのことである。その赤い灯の此方彼方に

動いてゐる樣が涼し氣でまた樂しさうに見えた。

欄干にもたれてその火を見てをると、一人の人がこんな話をした。

春の四五月の頃になると、山口縣の大島郡とか佐波郡とか又愛媛縣の八幡濱附近の海岸の村では、一艘の船に米、味噌、醬油を積み込んで、二三十人の人が一團となつてこの別府に來る。帆を掛けてはいつて來たその船は、波止場に繫いで、三週間ばかり滯在する。その間それ等の人は勝手に共同温泉にはいつて、夜はこの船に歸つて寢る。船では「大島郡何々村」と書いた大きな札を帆柱に打ち付けて置くと郵便配達夫はその船まで郵便物を配るといふ風であるさうな。時には御詠歌を歌つて町をあるいて一錢二錢の報謝を受ける。一圓か二圓たまると、それで寄席にはいるとか氷水を飲むとかするのを樂みにしてゐるさうな。一人五圓位の費用で三週間入湯して行くことが出來るのださうな。

龜川の四の湯に桃の女はまだきつとゐる。

日名子氏が案内にたつて大分市の元町にある磨崖の石佛を見に行くことになつた。折節同宿してゐる五十嵐播水君も共に。

午前七時に宿を出た。途中にちよつと立ち寄つたところがあつたので、電車で大分驛の前に着いたのは九時を過ぎる十分か廿分のころであつたらう。

それから人力車に乗つてその元町へとこゝろざした。元町といふのは大友氏時代に古い町があつたといふ意味であらうが、今の大分市としては殆ど郊外になつてゐるところである。車はぞろ〳〵と田圃の中の道を行くのである。折からのひでりで百姓の家族は皆畑に出て灌漑用水をいち〳〵汲み上げては田の中に注いでをる。子供は裸のまゝで、男は褌一つで、女は編笠をかぶつて、せつせと働いてゐるさまはたのもしげである。右手に見える竹藪がお竹藪と稱へて大友の屋敷跡であると日名子氏が説明してくれた。やがて元町の石佛についた。

その石佛は中央に大きな藥師如來、左右に不動明王、毘沙門天のかなり大きな像が彫つてあるのだが、凝灰岩の粗質な岩に彫つてあるため左右の像は

首が落ちたり磨滅したりして殆ど原形を存しないのであるが、たゞ中央の藥師如來だけは、片頰に大きな傷のあるほかは、まづ完全な形を存してゐるといつて好い。殊にそのそこなはれざる方の半面を見ると、端麗な相は鎌倉の大佛に似て更に柔和であるやうに思はれた。たいへんに暑いので、暫くその岩蔭にたゝずんだ。風はなくともどことなく冷え冷えするので暫く息をついた。

それから龍ヶ鼻の十一面觀世音その他の佛が澤山に彫つてある磨崖佛を見た。これは殆どこはれてしまつて僅にそれと認める位のものである。聞くところによると、昔乞食がすまつてゐて、その乞食小屋が燒けたゝめに、岩の質が更に脆弱になつて、さらでだに破損した佛は、いよ〳〵破損してその形

をとゞめぬまでになつたのであるさうな。

これから二里ばかり離れたところにもたくさんの磨崖佛があるし、又臼杵のほとりにもたくさんの磨崖佛があるとのことであるが、一々それを見に行くのは暑い時分にたいへんなことである。私はこの二ケ所の佛を見ただけで滿足して引返すことにした。

この龍ケ鼻に立つて遠望すると田の中に一つの森が見える。この森を印鑰の森といふ。これはもと豐後の國府のあとで、今は稻荷が祀つてある。又國分寺はこゝから一里半位のところに堂が存してをつて、礎石が點々とそのあたりに殘つてゐるさうである。

私達は又車に乘つて暑い日中をさきの停車場前に歸り、そこからまた電車

に乘つて別府の方に歸ることにした。

日名子氏は、夕方涼しくなつた時分にでも、別府市の近所の山にある横穴の古墳を見てもらひたいとのことであつた。私はどうせ見るのならば又出て來るといふのも面倒だから、この勢ひに歸りに寄つて見ようといつた。そこで五十嵐君は今日の紅丸で神戸に歸るとのことであつたので途中で別れた。私と日名子氏とだけが濱脇で下車して、そこの腰掛茶屋で蠅のたかつてをるすしと生卵で腹をこしらへ、金比羅山の南北兩方面にある横穴卽ちカンカン佛の横穴およびその附近の横穴を一見した。非常に暑かつた。谷間をたどつてゐるときなどは蒸し殺されさうに暑かつた。たゞカンカン佛を見終つて附近の山の背に出たときに、一陣の涼風が松の枝間を吹いて來て、覺えず蘇生

したやうな思ひがした。暫く芝の上に腰を下して休んでゐると、初めはそよそよと吹く風と思つたのが、なかなかにそれどころてなく、今は涼風を滿喫するやうな心もちていつまでも立ち去りがたい心地がした。ブーンとあぶが耳元をかすめて飛ぶのも快よいひゞきに聞えた。夏蝶のひらひらと茅萱の上を飛んてゐるのも涼しげな趣きに見えた。一本の蝙蝠傘が谷川の蘆の間を此方に來るのは何かと見てゐると、やがてその蘆間から現れ出たのを見ると、その蝙蝠傘の大きいのには似合はない一人の洋服を着た少女てあつた。此方を向いて歩いてゐると思ふうちに又いつか向うの方を向いて歩いてゐて、その曲りくねつた田圃路をたどりつゝあるのてある。

日向の國は日本て最も古い國てある。お隣のこの豐後の國もまた古い國てあらねばならぬ。その古い國といふ證據は、この磨崖佛や横穴の古墳があることによつて證明せられる。

私はその少女のやがて向うの岨道をたどりつゝあるのを靜かに目送した。

別府市長の神澤又一郎氏が來訪した時、いろいろの話を聞いた。

鐵道線路から下の方即ち海岸に近いところは、掘ればいくらでも温泉が湧出するさうてある。淺いところは十二三間深いところは六十四五間掘ればよいので、深いところほど壓力高く温度が強いとのことてある。

現在千四五百の温泉が湧出してゐるさうである。現在あるところから四十尺以内には新らしく温泉を掘ることを禁じて濫掘をいましめてゐるとのことである。

鐵道線路から上の方即ち山手の方は、掘つても温泉はたやすく出ないさうである。麻生太吉氏はその持つてゐる山手の地面を別莊地として各戸に温泉を配布するために、別に湧出する冷泉を鐵管に引いて鶴見地獄の熱汽の間を通し温泉をつくることにしたさうである。二個の鐵管を熱汽の中に六尺か十尺の間通すことによつて、優に所用の温度を與へることが出來るさうである。それほどその熱汽の熱度は高いのである。現在の鶴見地獄は澤山の熱湯を噴出してゐる形だが、これも熱い熱汽の中に人工的に水を加へてゐるのだとの

ことである。

來年四月別府に開かれる中外産業博覽會が特に温泉室なるものを設ける計畫であるが、この麻生氏の一本の鐵管、即ち一分間四石、六十度の温度のものを借うけることになつてゐるとのことである。

この熱汽を吐いてをる地獄は竈、血の池、紺屋、鐵輪その他にもある。熱汽に水を通して温泉とすることが出來るとならばまた新温泉は無數に出來るわけである。

朝からごう〳〵と飛行機が宿の上を飛ぶ。これは別府の海にうかんでをる水上飛行機が十分間十圓で客を乗せて飛ぶのださうである。油屋熊八氏はこの飛行機に乗つて八景入選の喜びを大阪まで述べに行き、歸りには別府に寄

らずすぐ長崎を訪ひ、「西に雲仙東に別府中に火を吐く安蘇の山」といふ俗謠をつくつて國立公園の宣傳に努めてゐる。頃日また鶴見のふもとの扇山の向う側に、小上高地ともいふべき一大溪谷があるのを發見したとのことで、氏自身二三日のうちにこれが探檢に出かけて行くといつてゐた。氏は弱冠六十五歳である。

別府の海には今二三隻の軍艦が繫がつてをる。船腹についたカキは別府灣の潮に浸ると忽ち腐つて落ちて仕舞ふのである。水兵は嬉々として町の中を歩いてをつた。

鐵筋コンクリートの市の公會堂が新築されつゝある。內容の設備は九州第一だと誇稱してをる。濱脇温泉は新築工事を成すべく地鎭祭を行つた。

宿の吾が部屋の眞正面に聳えてゐるものに高崎山がある。この山は由布、鶴見などの山系とはやゝ離れて、別府灣頭にひとり超然として聳えてをる。吾れ關せず焉といふ風に。

その姿も好い。西洋人はこの山をヘルメットの山といふさうである。

朝は一面に靄がかゝつてその山容は殊に柔かく見える。太陽が昇るに從つてはつきりと見えて來る。

雨が降ると必ずこの高崎山に雲がかゝるといふ。この高崎山に雲がかゝると雨が降るのかも知れない。わが部屋の軒いつぱいにひろがつてゐるやうに感ぜらるゝときもある。またさうでないときもある。

高崎山には猿が棲んでをるさうである。さうしてこゝは禁獵區になつてを

るので、猿は年々蕃殖するさうである。

高崎山には古城跡がある。それは何代目かの大友氏が築いた城である。

高崎山の木が茂つてゐるところには魚族がその蔭に集まつて漁が多いとのことである。

この座敷に坐つてゐて、一日の炎暑が漸くかげらうとする時分になると、この高崎山に黒い影がうつりはじめる。それは日の西に入るとき鶴見の高峰が投げる影であらう。

高崎山は四極山といふさうである。萬葉集に

しはつ山打越えくれは笠縫の島漕き歸る棚なし小舟　高市連黒人

とあるのはこゝだともいふし、それは攝津の磯菟津山を詠んだともいふ。

私がまた紅丸に乘つてこの別府を去るときには、海地獄の噴煙を遠く松林の中に眺めてしばらく甲板にたゝずむであらう。さうしてその目は必ずこの高崎山に轉ずるにきまつてゐる。高崎山は永く永く私の目から離れぬであらう。

夕立待つ高崎山と諸共に
火の國の筑紫の旅の日燒かな
日燒せし旅の戻りの京の宿

雲仙岳

与謝野寛

南歐の俤

上海通ひの急行船「郵船」の上海丸で神戸を立つたのが、七月廿二日の午前十一時。丁度來島海峽で日が暮れるので、暑さ知らずの涼風に吹かれながら、瀬戸内の最も島の多く美くしい部分を日の中に見られるから、夏の雲仙

行としては郵船に越すものはない。長崎へ着いたのが翌朝の九時、阜頭へ着くと、迎への自動車が待つてをり、すぐそれに乗込むと、一路島原半島を目指したのである。同行者は上野さんと大塚さん。

この前雲仙に上つた時は、茂木から、船で小濱に渡つてゐるので、今度はわざと陸行を選んだのである。千々岩灘に添ふ十五里の沿岸道路は、平坦な道の少い代り、風景の捨難いところが多く、退屈を覺えない。江の浦邊りから海が見え出し、海上にはいくつかの小島も見え、無數の漁船も見える。或時は松並木の間から、或時は斷崖の上からそれを眺めて行く。その間灣を隔てゝ、いつも私達を見守つてゐるのは、雲仙の懷かしい温容である。

愛野の地峽をぬけていよ〳〵半島に入ると、風景は更に一段の趣きを加へ

る。道は雲仙の山脚が海に落ちこんでゐる急峻な部分に通じてゐるので、可なり險しい絶壁の上を、屢々通らなければならぬが、そのために風致は歩々展開して行く。

この沿岸道路の趣きが、ヨーロッパで最美の道路として知られてゐるあのリビエラ沿岸、いはゆる碧色海岸のニースとモナコ間によく似てゐると人はいふ。私もこの前それに折紙をつけた一人である。軒蛇腹道とも別稱されるほど、しかく絶壁の上につけられた海岸道路から、松の生えた小島などを、南歐特有の青い空の下、碧玉の海面に見出しながら、ドライブする趣きは、こゝと少からぬ共通點を持つ。外人がこの沿岸道路を非常に喜ぶのもなる程とうなづかれる。この道路ではところ〴〵コンクリートの柵を廻らし、危險

に備へてある點も甚だよく彼に似てゐる。この沿線中、誰でも最初に深く印象づけられる景色は愛野の地峽をぬけて、斷崖の上から千々岩灘の碧灣に直面した時の眺めである。

見下す眼の下には、見事な長い半圓を描く千々岩の松原と、この半圓に添うて、いつも二段位に長いカーブを作つて緣取してゐる白波が見える。白波と松原との中間に、緩やかな傾斜を持つた大きな砂濱がある。それを見下したゞけてもいゝ眺めてあるが、少し眼を移すと松原の盡きる邊りに、雲仙火山群の一つである猿葉山の險しい山脚が、海に走つて形作つてゐる木津の半島が紺碧の海に突出しまたそれを隔てゝ更に、國崎半島が野母半島と相對して、大きく千々岩灘を抱擁してゐて、碧灣の中には白帆を張つた無數の漁船

がばら撒いたやうに散つてゐるのだ。それは全くピトレスクで、眺望の佳麗を以て知らるゝ雲仙の序曲であるにふさはしい。

こゝから小濱までの間は好風景の連續で、わけても富津の眞上から、その小さい築港と、港の鼻に突き出してゐる辨天崎の遊園地を見下した景色は寶石のやうな纏まつた美しさを持つ。この愛野、小濱間には小濱鐵道が開通されてあつて、私も一度試乘して見たが、それは短い間にいくつかの隧道を通じ、斷崖の上のみを馳るので眺望の點において遙に自動車道以上であることを附記して置く。

小濱温泉場に着いたのが十二時。一角樓といふのでゆる〳〵晝食を取る。長崎方面からの雲仙上りは普通小濱からするので、千々岩から上る木場道とい

ふものもあるが小濱の方が道もよし便利でもある。小濱からは二里半の上りて、三間乃至二間半の立派な自動車道がついてゐる。この二里半は上り一方の峠道で、曲折の多いだけ、景色の變化も多く、高くなるにつけ視界は美しくひろげられて行く。大分上つたところの「駕立場」は藩侯登山の折の休憩所で、こゝの眺望は雲仙の第一景として知られてゐる。雲仙の主峰普賢を初め妙見、仁田峠、絹笠、高岩、野岳と數へて來れば遙にそれ以上の展望美を有する地點は十指を屈するも足らぬが、さりとてこゝの展望にもまた特色があつていゝ、美くしい橘灣が目の下に見え、對岸の西彼杵、北高來の陸地を越した向うにはまた、湖水のやうに入込んでゐる大村灣が瑠璃色をたゝへてゐる。野母半島の彼方には、玄海灘が果しもなく、別にまた橘灣と玄海

を結びつける天草灘があり、大小の天草列島が、その間に星散碁布する。これだけの展望があればまづ、旅客を魅するに十分といへよう。殊にまた手近の脚下を見ると、雲仙の山脚が長く遠くその尾根をひいてゐる翠微の中に聯環湖であり山上湖であるところの諏訪池がたゝへられ、それが曲玉のやうな形をして、翡翠の色を浮べてゐるのが、さながら神祕の湖であるかの如く見える。この諏訪池がまたどれほど、駕立場の展望を美化してゐるか知れない。

駕立場から雲仙公園は近い。程なく二千二百尺を上つて、縣營のその公園につき、温泉旅館九州ホテルで靴の紐を解いた。私はこの前もその同じ部屋に泊つたので、舊知の宿は心易い。暫く休息してゐる中、これも舊知である

公園主事の園さんが見える。北海道の札幌と朝夕の温度が同じだといふその涼しさに、私達は蘇生つた氣がする。兎も角一浴をとすゝめられて、一度温泉に浸つて來た上、浴衣がけになつて、取あへず地獄めぐりを試みる。

こゝの地獄は別府の海地獄、血の池地獄のやうな大きなものはないが、別府のやうに散在的でなく大小三十余の地獄が一ケ所に集中されてあるので、却て壯觀である。この點は北海道の登別温泉に似てゐるが、周圍の風致において、廣さにおいて彼を凌いでゐる。これ等の地獄は絹笠山と矢嶽を火口壁とした爆裂火口丘の跡に存在するもので、大體において北方の大地獄群と南方の小地獄群とに帶山の丘陵によつて分たれる。周圍は鬱蒼たる山や丘陵で圍まれ、いづれに向いても赤松の夥しい存在が、少からず風致を助ける。

硫化水素の臭ひが四邊をこめ、山や丘陵や、赤松や、濛々たる蒸氣の間から、吹なびく風のまに〳〵隱見する趣きは、一種の地獄風景觀を形作る。

切支丹物語

私達は九州ホテルの裏口から、地獄めぐりの逍遙道路を經て、一々の地獄を點檢して行く。まづ最初に天然記念物として保護されてゐる泥火山がある。三四坪の凹地に淺い湧泉を湛へ、その底から青みがゝつた灰色の火山岩の分解物からなる泥土を一分間に數回づゝ噴出し、そこゝに所謂泥火山を圓錐

形に作り上げ、それが流れて裾野となる有様は、火山から熔岩の流出する趣きと異らない。またそれが一定の高さに堆積し、ガスの噴騰力に打勝つと、ガスは山腹に新火口を求め、そこに小さな寄生火山を噴起せしめる。すべてが火山の活動狀態と寸分の差がないので、小さいものではあるが、最も完全な標識的のものとして、その泥火山は學術上著名なものになつてゐる。

地獄の沿道には三途の川、劍の山、死出の山、老の阪、賽河原などがあり、地獄には叫喚地獄、難産地獄、無間地獄、妄語地獄、殺生地獄、八萬地獄、お糸地獄、清七地獄等々があつて、微苦笑させられるが、それらの地獄の名にも似ず、環境の美くしさにはまた驚かされる。それ等の地獄を緣づけてゐる丘陵には、地獄の煙のなびきかゝるところに、岩石をはふやうにして、葉

のこまかい、園藝品種としても名高い雲仙つゝじが、一面にはびこつてゐて、上の方へのぼるに從ひ、山つゝじ、瑤珞つゝじが、赤松の間に茂つてゐる。その花時の美くしさは何ともいはれぬので、私のこの前來た時は、丁度つゝじの花盛りだつたのである。また秋になるといろ〳〵の落葉灌木が紅葉し、殊に瑤珞つゝじが眞紅になる。地獄の上を血のやうに染めるもみぢ時の美くしさは想像に難くない。

その瑤珞つゝじは地獄附近では定時風で、いつも蒸氣が激しく吹きつけるところに群落を作り、目立つて繁茂してゐることが目につく。雲仙つゝじは地下一尺の所まで熱氣が來てゐる地上にも、平氣ではびこつてゐる。殊にまた硫黄を最も多く噴出し、四邊の岩石を黄色に染めてゐる叫喚地獄や邪見地

獄の上の、硫氣が絶えず靡いて行く邊にある赤松の葉色が、取わけ鮮麗な緑色を呈してゐるのも面白い研究資料であらう。私はまた莎草科の一種である「しまてんつき」が熱湯の流れてゐるところに最も鮮やかな色を見せて茂つてをり冷めた湯の流れてゐるところでは貧弱な生存を續けてゐるのを見た。更にまたさま〳〵の地獄から沸泉が湯煙を立てゝ流れて行く水路の底が美くしい碧玉の色に染まつてゐることを見逃すことは出來なかつた。この碧玉色の本體も高温の湯の中に繁殖する單細胞の藻類であつて、今はその繁殖時期であるため、一しほあざやかな碧色を呈してゐるのであつた。自然の中、最も植物に心を惹かれる私に取つてはかうした現象に接することは興味深いことだつた。

私は叫喚地獄の前に立ち、無間地獄の前に立つた。いや、地獄の名などはどうでもいゝ。すさまじい鬻音が、大地の底からうなりを立てゝ耳も聾するばかりに響く。硫化物や硅酸などを表面に沈澱させてゐる岩石の下は、ぐら〳〵と煮えくり返り、噴氣孔から烈しい勢ひで吐き出される硫化水素や、水蒸氣がもう〳〵として立昇る。灰色の池は全面沸々としてすさまじい音を立てゝゐる。一歩踏みあやまれば、全身は直に糜爛し盡くすであらうことを思ふと身の毛もよだつ。

私が目をつむると、忽ちそこに恐ろしい幻影があらはれる——。

裸體にされた幾組の男女が、かしこの岩石の上、こなたの熱泉のほとりに引据ゑられてゐる。牛頭馬頭に似た獄卒が、かれ等に苛責の鞭を加へてゐる。

かれ等はたゞ默々として、その鞭にたへてゐるので、地獄の地鳴りにも拘らず、死のやうな沈默が四邊を支配する。かれ等の胸から一樣に光を放つて私の眼を射るのは小さな十字架であつた。いな十字架の幻影であつた。彼等のあるものは、手足を荒繩で縛られ腹這ひに寢せられて、背中に熱泉を注ぎかけられてゐる。彼等の燒けたゞれた皮膚の臭氣が硫氣にまじつて私の鼻をつく。あるものは足を吊られて、逆さまに噴氣孔に下げられてゐる。それは一幅の凄慘な地獄繪圖でなくて何であらう。

忽ち濛々たる白煙が、一切を私の目から拭き消したと見ると、すぐまた現れた地獄繪圖には、一人の若ものが氣息奄々の姿で、地獄の傍に横たへられてある。彼は十六日間責め通されてなほ改宗を肯じないのだ。彼の全身は

悉く腐爛し、口も眼も鼻も癩患者のやうにたゞれ、彼より發する堪へ難い惡臭が恐ろしく鼻をつく。それだのに彼はなほ莞爾として、天の榮光をたゝへてゐるのだ。彼の上にはシメオンといふ教名が、イルミネーションの如く、空に燦として私の眼を射る。

けれども、私は更にまた驚くべき光景を見た。大叫喚の地鳴りを立てゝゐる岩石の上に、赤い湯もじ一つにされ、突立たせられてゐる一人のうら若い女性がある。丈なす髮はかの女の踵まで屆くかに見える。かの女のかぼそい首筋には巨大な重石が、ふつくりつぼみのやうに膨らんだかの女の双乳を隱すばかりに結びつけられてある。かの女はよろめく度に、幾度かたぎり立つ地獄の中に落ちこまうとしては、渾身の力をもつて僅に支へてゐる。けれど

もかの女の顏色は自若として變らない。かの女はさうして幾日も幾日もためされてゐる。かの女の上にもイルミネーションの文字鮮やかに、イサベラと記されたのが、私の眼に讀まれる。あゝ、けれどもかの女はいつまでそれにたへられるであらう！

私自ら、眩めくやうに覺えて、眼をあいた時は、たゞ美くしい自然と地獄の噴煙とのみが目の前にあつた。切支丹物語りと雲仙地獄、この二つを切離して考へることは出來ない。日本西教史の幾ページを彩る雲仙地獄の凄慘な物語りは、原城の歴史と共に雲仙を訪れるものゝ、必ずや記憶によみがへるところであらう。

スロープ

私は地獄めぐりを濟ませると、夕暮間近の景色を觀賞するため、こゝから十數町を隔つるゴルフ・リンクスへ出かけた。私はゴルフ・リンクスとして、これほど美くしい眺めと、親しみ易い温か味を持つたところを知らない。たしかに六甲以上であつて、東洋一と呼ばれてゐるのも恐らくは過褒ではあるまい。私はゴルファーではないが、こゝのリンクスには何とも知れぬなつかしい憧憬を持つ。面積が六萬坪あることや、延長が三千碼におよぶことなどは、私にはどうでもいゝ。それがまた日本一のパブリック・リンクスで、外

のリンクスのいづれも貴族的であるに引かへ、誰でも二十錢の入場料さへ支拂へば、ゲームの出來ることなども、これまたどうでもいゝ。こゝの瀟洒な休憩所へ勝手に來て、無料でこのリンクスのなごやかな、ひた〳〵と人に話しかけて來るやうな環境の美しさに、陶醉することが出來るといふのが何よりなのである。私はこの意味で雲仙のゴルフ・リンクスを禮讃する。

リンクスは東雲仙火山と西雲仙火山の接觸地點にあつて、すぐ背後に矢岳を負ひ、矢岳と野嶽との間の最低地空池を控へ、野嶽と連接する妙見岳の裾野が、見事なスロープを作り最左方石割山との間に、寄生火山を持つ第一吹越の障壁で、北を限つた一大盆地がそれである。この盆地を美化するためには、見事な松林がリンクスの中央に、中の島の如く延びて來てゐる。このリ

ンクスの美くしさは、畢竟スロープの見事な裾野の美くしさであり、四面山に圍まれた盆地の美くしさである。そこには目を遮る何ものもなく、空池の低地には池のほとり、滑らかな芝生から裾野へかけ、數百の馬が放牧されて畫趣を添へ、同じく一面の芝生であるリンクスの遙の斜面には點々として豆の如く、ゴルファーや普賢から下つて來る人達がうごめいてゐる。殊に今は避暑のシーズンで、千に近い外人の避暑客があるので、青衣紅衣の洋婦人が、このスロープを明るくして、散らばつてゐる趣きは、全くエキゾチックで、輕井澤でゞもなければこの光景は見られない。

雲仙の最高峰普賢はこゝから見えぬが、普賢を背後に隱してゐる妙見岳が、獨りそのたへなる姿を抽んでゝ、このリンクスに君臨してゐる。五月になる

と、裾野一帶はつゝじで彩られ、秋になると、麓から眞紅に染められて行くことを想像して見るがよい。四面山に圍まれて、全く塵境を離れた、處女の肌のやうに滑らかなこのリンクスの美くしさは、夕暮が近づいて、靜けさが加はるほどます〳〵發揮される。私達は飽かずリンクスの美を觀賞した上、迎への自動車で引返したが、夏の日の暮れるに遲く、まだ日足があるので、折柄の時雨空を冒し、稚兒落の瀧を見て歸るため、木塲道をくだらせた。

木塲道は雲仙から千々岩に下る道で、これも自動車を通ずるが、カーブが甚だしいのと道が狹くて急であるから、多く小濱道が選ばれるのだ。併しこの道は絹笠山と妙見の山脚の間を下るので、幾筋にも走つてゐる小さな尾根を見下しながら。また谷間をS字形に縫つてゐる眞白な行手の自動車道を蒼

翠の間に見出しながら、いつても千々岩灘と千々岩松原を、兩山脚の間に見て、一氣呵成におりて行く趣きは、時々ひや〳〵させられるが興味が深い。時雨がやんだり落ちたりしてゐたが、折柄の灰色雲を破つて入日が漏れ、それがハレーションを起して、脚下の千々岩灘も空も一樣に、ぎら〳〵と輝き渡つた海天一色の莊嚴な光景は私達を魅了した。雲仙のハレーションは名物の一つでもあつた。

天きらふ鈍色雲に入日さし、かがよう海の果し知らずも

木塲道の三分一位を下つたところで自動車を駐め、谷を分け下るとすぐ稚兒落瀧である。この瀧は温泉名所の一つではあるけれども周圍の岩石が酸化鐵の色を帶びて赤く、水も清冽でないので、瀧としての風致を欠く。わざわ

ざ見るほどの瀧でもないと失望したが、たゞ稚兒落の傳說を知つてこの瀧に對する時、そこに感興を覺ゆるのみである。

歸途別所の盆地を過つたが、ここには縣營の大きなプールが出來るはず。見事な原始林に添うて、淸冽な淸水の無盡藏に湧出してゐるところであるから、それを利用すればどんなに大きなプールでも出來よう。プールと共に小兒達の水遊び場を作り、水の遊園地とするはずで、やがては雲仙名所の一つとなる日も近いであらう。

私の第一日の行程は終りを告げた。案じられるは普賢に上らうとする明日の天候である。この前上つた時は、山上で雷雨に逢ひ、どこも見えずじまひに、骨まで濡れて下りて來たので、今度は是非とも天氣を見定めてからでなければ上れないのだつた。園さんの話しによると、この一週間ばかり普賢にいつも霧がかゝり展望が得られないので、今日の時雨空から推すと、明日も到底霧晴れは望まれまいといふのだ。私はひどく失望しながら、よし、それなら幾日でも霧の晴れるまで待たうと決心したのである。と、その夜の十時前、私が寢台に入らうとすると、ノックして入つて來たのは園さんで、空はすつかり晴れ、この模樣では、明日の山上も日本晴れになりさうだから、六時に宿を立つて普賢に上ることにしようといふのだ。それを聞くと私の胸は躍つた。喜びと期待に滿ちて寢台に入り、ぐつすり寢込んで五時に目をさまして見ると空はあつらへ向きに、からつと晴れ渡つてゐる。

朝の手水を濟ませ、浴衣がけにバッチ、紺足袋に草鞋ばきといふ、どんな

に汗をかいても心配のない、氣樂な身ごしらへの出來上つたところへ、園さんが同じく身ごしらへをかためて「このごろにない上天氣です。」とにこ〳〵しながら出て來た。まだ外人等は寢入りばなで、食堂はがらんとしてゐるから、私と園さんは異樣な風體のまゝ食堂に闖入し、パンとハムエグスか何かてそこ〳〵に朝飯を濟ませサンドウイッチを作らせた上、人夫を引具し、勇ましくも(!)雲仙の第一峰に向け出發した。時は昭和二年七月二十四日午前六時。

霞の海

私は登山に先だち、一くだり雲仙岳の概念を與へて置く必要を感ずる。人はたゞ無雜作に雲仙と稱するけれども、雲仙岳はしかく單純な一個の山を指すのではない。普通雲仙岳と呼ばれるのは、普賢、妙見、國見、絹笠、野岳等を一括した總稱で、時にはその最高峰普賢にこの代表的の名を與へる事もあるが、その實雲仙岳といふ單位の山岳はないのである。地理學上の雲仙岳は二座の火山群から成るところの二重火山で、九千部山と千々岩岳、それに地獄火山とこの三個の中央火口丘を有してその周圍に鳥甲山、吾妻山、鉢卷山、矢嶽、絹笠山、野嶽、高岩岳を外輪山とする西雲仙火山と、普賢岳を中央火口丘とし、國見、妙見、江丸山等を外輪山とする東雲仙火山との交錯から出來上つてゐる連峰を指すのである。噴出の年代からいふと西雲仙火山が

舊く、東雲仙火山は新たに噴出したものてある。西雲仙火山の範圍は大きく、東雲仙火山の範圍は狹い。私達が昨日見て來た地嶽は舊火山てある西雲仙中央火口丘の一つが、その後絕えず繰返された爆發のため山形を失ひ、現在の地嶽盆地を現出したものに外ならないと、地質學者は說く。そして私が今上らうとする普賢は、新火山の中央火口丘なのてある。私達はこの火口丘の外輪山てある妙見岳の外側面、凡そ卅度の緩傾斜をなしてゐる裾野から、西雲仙舊火山の外輪山である野嶽の內側面に添うて、妙見と野嶽を連ぬる一線仁田峠を目ざして上つて行くのて、ゴルフ●リンクスを橫ぎつて進むのてある。温泉所在地から普賢の絕頂まて二里、リンクスから仁田峠まて三十町と註される。

野嶽がこの登山道路の東を塞いてゐるのて、朝日を遮つてくれるから、私達は蔭の道を進むことが出來る。朝の谷間を登る爽快さには身體もひきしまる。道端には淡紅の花を簇開する小灌木「しもつけ」がまだ咲殘り、帶紫色の鐘狀花螢袋や、虎の尾がちよい〳〵その間に交る。「かくうつぎ」が白い花をつけて灌木の間を彩る。小禽や藪鶯の聲がひつきりなしに聞えて來る。もしそれが五月であるならばこの邊は谷といはず、岨といはず、見渡す限り、色さまゞに咲き誇る各種のつゝじが、大群落をなしてゐるのてあるが、今は花がなく、たゞ遲れ咲きに咲いてゐる赤花の山つゝじが、點々見出されるだけてある。

私達は汗もかゝずに三十町を上つて、海拔一千八十米（三六六五尺）の

仁田峠へ來た。空氣はそれほどひやゝしてをり朝日はまだ山を出ない。峠へ來て初めて谷をぬけるので、忽然として海洋美の大觀に接する。普賢へは上らなくとも仁田峠は見落とすなといはれてゐるほどその風景は美くしい。私は仁田峠と、普賢の絶頂と、高岩岳の展望を、雲仙の三大景觀として推奬したい。しかし雲仙の美はこの三大景觀に止まらず展望の利くところはどこでも美くしいので、それは一面島原半島の海洋美であつて、海洋美を兼ねることによつて、山嶽美の高調される雲仙の如き名山は、誠に類稀なるものといはねばならぬ。

この朝の仁田峠の展望は、全く素ばらしいものだつた。私達は今妙見岳の鞍部、直下三千尺の溪谷赤松谷を見下した眞上に立つてゐる。海岸線に向つ

て幾つかの尾根が、美しいひだを作つて、放射狀に走つてゐる。赤松谷は爆發火口原であるが、その急峻な傾斜面には赤松が生え、樅が生え、椎、樫などの雜木が、鮮麗に頂の緣を見せて鬱蒼としてゐる。更にその末が裾野となつて、緩やかな傾斜で海岸に延びてをり、そこに千々岩灘とは反對の側の有明海が、紺碧の色をたゝへて展開する。

有明海を隔てゝ一眸の中に入る肥筑の山野、墨繪の如く有明海に斗出してゐる宇土半島、半島の突端からつゞく天草列島——盆景の小島の如く浮んでゐる島の數の如何に多いことよ。列島の彼方に別にエメラルドの色をたゝへてゐるのは八代海である。けれども今目路の限り、紫がゝつた薄絹の帷の樣に、朝霞が一面に棚引いてゐるのだ。八代海はすでに半以上ぼかされて霞

と海の見界はつかない。この霞の海の莊嚴さはこれを何に譬へやう。それはたゞ一抹にぼかされた霞の海であるだけではない。九州の連山、天草諸島、すべてが遠きも近きも、一樣にその裾を消して、頂のみをこの霞の中に現してゐるのだ。それがくつきりと濃い桔梗色であり、また紺青色である。

遙に思ひもよらぬ後方の群を拔いた空に、ぽつかり浮んでゐるのは祖母の頂である。離れて久住の頂が、やゝ低いところに見える。英彦が見える、市房が見える。日向の連山のいくつかゞ、斷續してその黛を描く。殊に私を喜ばせたのは、左方に當たり肥後の連峰の黛からぬきんでゝ紺青色の阿蘇の上半部とそれに靡きかゝる噴煙を、はつきりと眺め得たことであつた。霧島の噴煙ももつと晴れゝば見えるとのことであつたが、今日はそれまでは

見えない。更に近間の宇土半島と並んで、熊本の金峰山が、その上半部を最も濃い桔梗色にぼかしてゐるのが目につく。三角の三角岳も同じ色に鮮明にぼかされてゐる。これ等幾十と指點することの出來る山や島の頂線のみが上下相重疊して、鮮明にはてしのない霞海の中に、無言の交響樂をかなでゝゐる莊嚴な光景は、これを現實と見るには余りに清淨であり、神祕的である。殊にまた右手の霞の海の果てに、横線を劃して積雲の層が見事に現れてゐることが、この光景を一層淨化してゐるかに見える。きのふ、私が地獄繪圖を見て來たならば、今目のあたりに見る光景は、極樂淨土繪でなくて何であらう。もしまたこの積雲の間に、二十五菩薩を畫いたならば、それは實に素ばらしい來迎圖でなければなるまい。

その紅葉時

今まで海に面してゐた眸子を轉ずると、峠へ出るまでは見えなかつた普賢の峻峰が、突如として道の行手を遮つて、目の前に表はれる。また左手の眞上には妙見の内側面が、私達の踏んで來た外側面の緩傾斜に引かへ、凡そ六十度の急傾斜をなし、切つ立てたやうな巨巖の絶壁となつて、私達の頭上を壓迫してゐる。私はまた暫くこの崇高な普賢と妙見の山容に魅せられて立つた。

この峠から普賢へ上るためには、こゝからまた左へ落込んでゐる薊谷の溪谷を下らなければならなかつた。それは降つてまた昇るのであるが、暫くは

密林帶で、數町の間樹木に蔽はれて、日の目も漏らぬトンネルのやうな幽邃な谷がつゞく。降り口の邊は犬つげの巨木が最も多く、松は姿を消し、かへて、くろびいたや、うりはだかへて、ときはかへて等深山性の楓樹屬の樹木が次第に多く、その間にまさき、あぶらちやん、のぶのき、くまして、うつぎ、にしきぎ、くろもじ、うるしの木、山はぜ、丁子櫻、山ぼうし、かまづか等の落葉喬木が繁茂し、いづれも秋季黄紅葉する樹木である上に、つたうるしや蔓は隨所の樹木岩石を鎖し、山つゝじ、瑤珞つゝじなども交つてゐるので、如何に紅葉植物が、全山を蔽うてゐるかに驚くであらう。

この薊谷は舊噴火口の跡なので道の兩側には無數の熔岩が、大小錯落として横たはつてゐるが、霧が深いのと、年代を經てゐるので、悉く苔蒸し、

樹木は多く熔岩の集團の上に根を張つてゐるのである。その苔蒸した熔岩にはまた髯のやうに糸すゞが生えてをり、豆づたや岩がらみが纏つてゐて、地肌の見える岩はなく、その一ッ一ッが庭にても据ゑようものなら大したものである。さうした谷間を暫く進んで行く中、熔岩の上に瑠璃色の可憐な花をつけてゐる小灌木を發見したが、それは思ひがけぬ深山紫陽花であつた。深山紫陽花は登るに從つて多くなり、道端から分岐してゐる小さな谷々の中には、紫陽花が一面に咲いて、谷を瑠璃色に染めてゐるところもあつた。幽邃な霧深い谷間が、夢のやうな色に染まつてゐるのを見ると、何とも知れぬ懷かしみに打たれる。

山ぎりのかゝる谷間を夢のごとほの青くして咲ける紫陽花

山紫陽花はこの谷間と妙見の外では見なかつたが、妙見では一方の日を受ける谷の岨に淡紅色の「しもつけ」が群落を作り、一方の蔭の谷では、紫陽花がまた群落を作つてゐるのを見て、お伽噺の谷にでも來たやうな美しさに打たれたことをこゝに書き添へる。

しもつけと紫陽花と咲く水無月のとき色の谷るり色の谷

谷を上つて峰がまた轉ずると、今度は薊谷と共に雲仙の二大渓谷であり、また同じ舊噴火口であるところの鬼神谷の眞上に出る。こゝでは國見岳（四二〇尺）が正面に見え、左に妙見右に江丸と外輪山が、環狀に堵列して普賢に向つてゐる有樣がよく分かる。鬼神谷は深くその間に落込んでゐるので、暫くこの落葉樹林に包まれた美くしい渓谷を見下しながら、岨傳ひに進ん

て行く。道はますく嶮しくなるが、次第に絶頂に近づき、巨大なくまして、が純林風に蟠屈してゐる中をぬけて出ると、天地は忽ち開けて、一千三百六十米（四四八八尺）の普賢の絶頂に立つ。

高さからいふと、山嶽としてはいふに足らぬが、さてもその展望の雄渾秀麗なることよ。雲仙がその景觀において、山嶽中の首位に推されることの當然さを、一たび普賢の絶頂に立つたものは、誰でも首肯するであらう。仁田峠の展望を素晴らしいといつた私は、普賢の展望を何と形容していゝか、辭なきに苦しむ。この眺望に接した私の歡喜を、この法悦境をどういひ表はしたらいゝであらう。仁田の展望は、よしそれが風景のエキスであつても、普賢の展望の三分一に過ぎない。更にこれに三分二を加へたものが普賢の展望

て、從つて美の包容量も三倍される。しかも同一展望でも、仁田峠より更に約一千尺を上つたこの絶頂からそれを眺める時、爽快の感情が加はること、いふまでもない。

こゝでは、東西雲仙の連峰は悉く脚下に朝宗する。これ等の連峰はまた、幾十の枝峰、皺襞を作り普賢そのものも六峰に分岐し、深い襞を作つてゐるので、これ等を足元に見下す心地よさは、全く羽化登仙の快味である。それ等の山々谷々は、悉く紅葉植物に蔽はれてゐるので、同一色のくすんだ針葉樹林などゝ違ひ、現在においても葉色にさまく〳〵のニュアンスとトーンが出てをり、眼に甚だ心地よい刺戟を與へる。もしそれ、紅葉時の全渓燃ゆるやうな美しさを、紺青の海を周圍に控へた普賢の頂上から見下した壯觀は、

想像しただけでも心がをどる。實際雲仙の紅葉は他に比肩するものなく、日本一の折紙がつけられてゐるのである。

無比の展望

私は今妙見、國見に對し西北面して立つ。東南に面する仁田峠とはまさに正反對である。正面には千々岩灘が見える。國見の頂の彼方に大村灣が見える。佐世保軍港の無電局が鮮明に見える。また野母半島を越して玄海灘の水平線と思はるゝ霞の奥に、五島列島が淡く並んで見える。國見と江丸山の彼

方には、有明海が彎曲して現れる。有明海の彼方には肥前の山野が望まれ、多良岳は最も近く聳えてゐる。かくて僅に愛野の地峽を殘して、四面環海の中に立つ雲仙の第一峰は、東西南北いづれに面しても、優れた風光に惠まれ、目に何等の遮ぎるものもなき雄大無比の鳥瞰的展望を展開する。それは實に雲仙が他のヨリ高き幾多の山嶽に優越せる一大特色で、この特色は一にまた玄海灘、八代海、大村灣、千々岩灘、天草洋、有明海等幾多の區分された海洋と、天草諸島をはじめ多數の島嶼と、更に屈曲極まりなき海岸線を持つ陸地との交錯によつて、地理的に變幻無比の地形が、その周圍に構成される賜物に外ならぬ。私は再び繰返すが、海洋美と山嶽美と渾然融和して、大風景を形作る雲仙の如き名山を知らない。

名に高き山は多けどこの山の大き眺めにあに如かめやも

この山の海の眺めにたぐへては屋島も鳥羽もなほ如かずけり

見渡せば霞の海に紺青の眉のみ描く八十の島山

私がこの前普賢に上つた時、雷雨に逢つた事は既記したが、山雨まさに至らんとする前の普賢の印象も、長く忘るゝ事が出來ない。山上はたゞ濃霧の海で、數尺先はもう見えず、それでゐて疾風が渡ると、魔術の杖を加へたやうに濃霧が部分的にサッとふき消されるその瞬間に、脚下の薊谷や、鬼神谷の大溪谷が、神秘の帷を引いたやうに、鮮明に一部分をあらはすのだ。それもたゞ文字通りの瞬間でかき消される。國見や妙見にはつゝじが美しく咲いてゐたので、その美くしい色彩が、虚無の間に瞬間的に見えてはまた消える。

その夢幻的な濃霧の遊戯を見ただけで、私は酬いられた氣がした。

殊に私の立つ絶頂の岩壁に、クリーム色の深山石楠花が清らかに咲いてゐて、それがおぼろに霧に包まれ觸れば消えもするかのやうほの白く夢見るやうに咲いてゐた趣は、この世の花とも思はれぬまでの、純潔さと神々しさをさへそこに點出したのである。この石楠花はどんなに私の心を惹きつけたであらう。少し絶頂を下つた普賢の祠の大岩壁にも、この石楠花は一面に咲いてゐて、これも霧のまがひに隱見する風情は、下界のものにのぞかれるのを吝むかのやうに見えた。

ほの白く山きりかゝる岩の上に觸れば消ぬがに咲ける石楠花

霧の間に深山石楠花咲つゞくその岩影は去りがてぬかも

それは當時の私の實感であり、また普賢の祠を離れるまでは、霧のみてまだ雨にならずにゐてくれたことは何たる幸であつたらうと、今でも感謝せずにはゐられない。

絶頂を下りて四五町のところに、その普賢の石の祠はある。石楠花の咲いてゐたその背後の絶壁は、高さ九十尺幅百二十尺の屏風を立てたやうな角閃安山岩から成立つ。雲仙一帶を構成する火山岩はすべてこの安山岩で、長石、角閃石、黒雲母等それに雜る斑晶の多少の差を認めるに過ぎない。祠を少しく離れたところに、小さな火口湖であるところの普賢池がある。池の周圍には繡線菊が多く、いまだに名殘の花をつけてゐる。こゝからうつぎやくましでの林を分け、數町下ると、そこに明暦三年の爆裂孔で、熔岩トンネルを形

作つてゐる鳩穴がある。直徑百四十尺、深さ三十五尺のグロテスクな大きな穴で、夏も氷が張りつめ、凉風が腋下を掠める。冬の雲仙は霧氷で有名であるが、雲仙が霧氷にかけられる時、この鳩穴は玉簾をかけつらねたやうに數十尺の大氷柱が隙間もなく懸垂し、この世ながらの水晶宮を現出するさうである。

この邊からの谷間は極めて陰濕で、累々たる熔岩の集團には、こけがいよ〳〵深く、樹々の枝には「さるをがぜ」がつき、谷間にはしゝがしら、ゐので、かなわらび、しけしだ、おほしだ等水龍骨科の隱花植物が群生し、木漏日ももらさぬ薄くらがりに、大きな葉をひろげた廣葉天南星や、まゝむし草などが思ふさまにその成長をつゞけ、むしろ薄氣味惡い位。しめつたひや〳〵した

空氣が汗ばんだ肌に心地よい。さういふところをぬけ、つめたい氷のやうな風の吹出してゐる二三ヶ所の風穴の前を通つたりして、鬼神谷の上へ出ると そこで元來た舊道に合する。私達はこゝでサンドウィッチなどをひろげた上、そこからまた細い山道を傳はつて、八町の上りに過ぎない妙見へ上つて行つた。

ロッキー・ヒル

私達はすぐ妙見の頂に出た。妙見は普賢より四十米低いに過ぎないが、この內側面に面した方は急峻で、普賢がその前に來り、且密林に蔽はれてゐ

るため、たゞ西南の展望を有するに過ぎぬ。また普賢のすべて密林に蔽はれてゐると違ひ、ゴルフ●リンクスに面するところの、緩傾斜をなしてゐる外側面は、主に小灌木の密集を見るのみである。その小灌木の大部分は深山霧島性のつゝじで、そのつゝじが絕頂まで茂つてゐる趣きは普賢と全く相違してゐる。全體つゝじは千五百尺以上の高度には生育せぬものとされてゐるのに、こゝでは四千四百尺の絕頂まで咲きつゞくので、それは全く他に類を絕してゐる。

絕頂の苔蒸して、雅味を帶んだ妙見の小さな石の祠のあるあたりには、つゝじの株最も多く、現在では螢袋が夥しく花をつけてをり、しもつけもまだ殘んの花を見せてゐる。この邊は辨當でも開くには最もよく、普賢ほど

の展望はなくとも、野嶽からゴルフ●リンクスを見下した景色は明麗であり、九千部岳、千々岩岳を中心として鳥甲、吾妻、鉢巻等を外輪山とする西雲仙火山の大觀が得られることを取るべしとする。

私達は妙見を降りて、今度は野嶽(三五〇〇尺)の上へ降つた。野嶽はまたつゝじの名所で、特に各種のつゝじが多く頂上がほゞ平坦になつてゐるので、そのまゝ遊園地の趣を呈する。泊岩の奇岩の累々たるあたりは、これまた自らなる庭園で、小さな盆地には水を湛へ、黄楊、つゝじなどの群生してゐるものは、皆刈込んだやうな形をしてをり、有明海、天草灘を振分けに眺めるそのすぐれた風景と相待つて、愛すべき別天地を形作つてゐる。

私達がゴルフ●リンクスの休憩所まで歸つて來たのは午後一時だつた。

私は午後の三四時までを九州ホテルで休養した上、夕暮、上野さんや園さんと、白雲池から白雲牧場の方を散歩して見た。白雲池は美しい絹笠山の麓にあつて、山上湖であるに相應しい靜かな環境を持つた油繪のやうな池である。殊に避暑外人の借りてゐるバンガローがそのほとりにあつて、金髪の女や幼女が、青や黄や赤や、スマートな服裝をして池邊に戯れたり、ボートを漕いだりしてゐるのも、外國らしい感じを抱かせる。牧場は、やゝ離れたところにあつて、山に放牧されてある數百の羊の群が、二頭の番犬に前後をまもられて、柵内に歸つて來る趣きは、これまた油繪そのまゝである。

私は翌日、私のいはゆる雲仙三大景觀の一つである高岩山に登つて見た。高岩山は外人がロッキー●ヒルと稱し、雲仙に來たものゝ、必ず上るところ

になつてゐるほど、しかくかれ等の間に、有名になつてゐるのであつた。海拔八八〇米（二八九〇尺）に過ぎず、普賢などに比べて遙に低いが、巨巖の最も多く露出してゐる山であることが異彩を放ち、また、雲仙火山群の最南端の山であるゆゑに、天草諸島を最も近く俯瞰する眺望はすぐれてをり、またこゝへ來て、はじめて島原の九十九島を望見し得ることにおいて、風景の上に特色を持つ。なほ矢岳の山脚と相接するところに、寶原の高原があるが、この高原がまた見渡す限りのつゝじ原で、すぐ目の下にこのお花畑を見下す五月の高岩山が、如何に美しいであらうかは、容易に想像されよう。

天草灘に面したこの山の南西腹は最も急峻で、すさまじい岩石が、殆ど柱狀節理をなし、層々相重なつて斷崖に臨んでをり、山上にも多くの巨岩が、

天を摩して聳立してゐる有樣は、耶馬溪の鳶巢山にも比すべきであらう。殊にこの山は雲仙の連峰から、やゝ離れて孤立してゐるため、却て雲仙連峰を顧望するによく、有家島原方面に、緩やかな大傾斜を作る美しい雲仙の裾野を、一眸の中に收める氣も晴れやかな大觀は、高岩に上つて得られるのである。

小地獄温泉

高岩の歸途、その途中に當る小地獄温泉の榊屋といふに休息し、一浴を試

みた。こゝは新湯、古湯等の他の温泉場と數町を隔てた谷間の別天地をなしてゐて、新湯の現代式なのと相違し、全く田舍の湯の宿の氣分の漲つてゐるところである。私共が晝食を取つてゐる時、田舍藝者の出稼ぎである二十あまりの白粉をぬつた法界節屋が、お煙草盆に、これまたまつ白にぬり立て、メリンス友仙の單衣を着せた三人ばかりの女の子を引率し、宿の前へ流して來たのも、湯の宿情調を助けるものだつた。丁度その夜、同じ法界節屋が、新湯へも流して來てゐて、各ホテルのボーチ先で、女の子にかつぽれや深川などを踊らせてゐると、ホテルの外人達がよつてたかつて見物し、一踊り濟むと、女の子が持つて廻る帽子に銀貨を投げ入れてやる趣きは、外國の避暑地のカジノやキユールサールに見る同じ光景であることが私の興味を惹いた

ことをつけ加へて置く。

こゝの地獄は、たゞ一ケ所であるが、地獄の大きくて湯の豐富なことは雲仙第一で、共同浴場ではあるが、そこに湯瀧の設備があり、清潔でもあり、湯治の目的には相應しいところであると思はれた。食事には上野さんも來會し、この温泉場の元勳で、詩書に堪能であり、雲仙陶器の創始者と知られ、同時に七十三歳を迎へた今年のはじめから、雪白の頭に、黑髪をおびたゞしく生じはじめたことで、評判になつてゐる本多親基翁も來會された。食事後私達は本多翁をも加へて、こゝから三里の諏訪池を見に行く。